

地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

DePOLA

でほら

37

2009年
秋冬号

特集 地域活性化のサポート隊



宝くじ

本誌は、宝くじの普及宣伝事業として作成されたものです。

「地域活性化のサポート隊」 特集企画に寄せて

過疎化と高齢化がすすむ農林漁村を活力あるものにしていくために最も必要なものは、優れた人材です。過疎地域では何をやるにも人手が十分とはいえず、特に地域づくりの核となる若者や中高年者たちは、仕事をかかえながら地域や集落の各種活動に日々奔走する多忙な生活を送っています。高い専門性が要求される仕事や地域活動に対しては、それを支援しようと、国や県等で各種研修制度を設置していますが、参加する時間や機会が少ないこともあって、地域で活かされているとは言えないようです。また、住民生活を最もサポートする自治体も、合併とそれに伴う人員削減、厳しい財政状況等で、地域住民の要望には充分対応しきれれていません。

日本の過疎対策の柱として昭和45年に制定された「過疎地域対策緊急措置法」の施行から来年で40年。10年ごとに名称を少しずつ変えながら新法を制定し、「雇用の拡大」「地域の活性化」「I・Uターン対策」「交流事業」等に取り組んできました。その結果、道路整備や施設建設等のハード面の整備、都市住民との交流活動等は活発になってきました。が、過疎化は一向に解消されず、最近では「限界集落」という言葉さえ生まれています。

この状況を、「過疎地域の住民は行政を含めて、国や県等から助成してもらおうことに慣れ、自分たちは主体的に地域を守る意識や行為が

希薄だった」とか、「経済大国ニッポンでは都市に人口が集中、地方が過疎化するの当然で、今後も過疎化は進む」、「補助金よりも地域に必要なのは『補助人』だ」等と地域問題の専門家は指摘しています。

総務省では今まで、各省や都道府県と協力して地域の活性化や人材育成を図ってきましたが、平成20年8月には「集落支援員」制度を新設して、過疎地域の集落を見回り、高齢者の支援や集落の活性化をアドバイスする支援員の活動を促進しています。

しかし過疎地の限られた人材の中で支援員を確保していくのは難しい市町村もあり、都市等から新たな人材を確保・派遣していく必要がありそうです。

そんな中で、過疎地域に入り、地域の産業や自然環境の調査や整備、住民生活、医療・福祉等を支え、指導し、共に汗を流している人たちがいます。高い専門性を持つ人たちです。また、地域住民の中にも研修等を受けて地域おこしに新たな視点で取り組む人々や、伝統の技術等を次世代に伝承する努力を続けている人々があります。

「では」37号では、都道府県や各団体、企業等が行っている支援制度の紹介と、支援隊がその専門性を活かして、地域産業の活性化、地域医療や地域福祉、地域おこし等に取り組んでいる事例を特集しました。取材させてい

ただいた方々は、地域のためにと日夜努力しており、皆さん大変多忙で、頭が下がる思いでした。多分地域の人に劣らないほど地域を愛し、地域の将来を考えています。

専門家のサポートが地域をただちに活性化するとは言えませんが、外部からの視点や提案は、地域住民に地域のよさの再認識と自信を与える効果を生み、沢山の元気を与えてくれています。



竹林の整備をはじめ、地区の美化活動に取り組む「向淵さとやま遊友クラブ」の男性たち(奈良県宇陀市室生区)

子供たちや若者が地域の将来に夢を抱ける場所、年取ってもどこよりも住みやすく安心して暮らせる場所、都市の人たちがぜひ行ってみたい「ふるさと」的場所。サポート隊と住民の取り組みで魅力ある地区に再生しつつあるそんな場所をご紹介します。

「では」編集部
財団法人過疎地域問題調査会

「地域活性化のサポート隊」

●特集企画に寄せて 2



長野県林業大学校、ワイヤの結び方を学ぶ学生たち

■活力ある地場産業の振興を

●三宅島の農林漁業の再生に取り
組む **東京都島しょ農林水産総合センター**
(東京都三宅村)——4

●心にも豊かな森林を育てる
長野県林業大学校／木曾南部森林組合
(長野県木曾町・大桑村)——10

●地域の人々に支えられ、和紙
職人をめざす(島根県浜田市三隅町)——14

■地域医療と高齢者福祉を支える

●地域医療の再生とまち創り [夕張希望の杜]

「村上スキーム」に共感する医師たち/
都庁から来た義勇軍
(北海道夕張市)——18

●地域医療をプロ集団(地域医療振興
協会)が担う 磐梯町保健医療福祉センター
「瑠璃の里」(福島県磐梯町)——22



「瑠璃の里」、介護老人保健施設「りんどう」

■魅力ある地域へ——支援隊と住民の取組み

●水源の森を企業と地域で守る

[キリン福岡水源の森づくり](福岡県朝倉市・東峰村)——25

●達人たちがガイドする熊野の豊穡な世界へ
紀南ツアーデザインセンター(三重県熊野市)——28

●お父さんパワーを結集して
竹林整備

向淵さとやま遊友クラブ
(奈良県宇陀市室生区)——32

●月山山麓に再現した「日本の風景」新たにシネマの感動と歴史
を刻む 庄内映画村プレオープン
(山形県鶴岡市羽黒)——35

INFORMATION 39

田舎暮らしをサポートする各種制度 他
編集後記 / 奥付 39

庄内映画村に開設された映画のオープンセット。
かつての田舎の原風景が再現されたゾーン

「でぼら」とは——

Depopulated Local Authorities (人口が減少した、つまり過疎化した地方自治体)からのネーミング。

過疎市町村の多くは山間地や離島など森林面積の多い農山漁村地区で、全般に人口の減少や高齢化が進んでいます。国土の保全・水源のかん養・地球の温暖化の防止などの多面的機能により、私たちの生活や経済活動に重要な役割を担っています。このような過疎地域は、豊かで貴重な自然環境に恵まれ、伝統文化や人情あふれる風土が数多く残っています。

多くの人たちが過疎地域を理解し、過疎地域と都市地域が交流をすすめる、共生していくためのホットラインとして、また過疎地域相互間の情報誌として「DePOLA」(でぼら)を発行しています。

●表紙写真

左上／熊野川をガイドする荘司さん(紀南ツアーデザインセンター／三重県熊野市)

右上／「夕張希望の杜」、高齢者のリハビリを指導する村上医師と理学療法士(北海道夕張市)

左下／パッションフルーツを栽培する沼尻研究員(東京都島しょ農林水産総合センター三宅事業所／三宅村)

右下／石州和紙の職人をめざして移住、和紙工房で働く村子さん(島根県浜田市三隅町)

中／元炭住「幸福の黄色いハンカチ」想い出ひろば(夕張市)



■活カある地場産業の振興を①

三宅島の農林漁業の再生に取り組み 東京都島しょ農林水産総合センター（東京都三宅村）

「広大な海を持つ」
「海洋都市TOKYO」

「巨大都市・東京は国内有数の『海洋都市』でもある。最南端の沖ノ島島、最東端・南島島と伊豆諸島小笠原諸島を含む東京の排他的経済水域は170万km²にも及び、日本の同水域全体の4割に当たります」と東京都島しょ農林水産総合センター・岩田哲前所長は言う。

東京の人口が約1300万人に対し、11の島（9町村）の総人口は2万8000人。島の住民一人当たりの排他的経済水域は約60km²になり、山手線内の面積とほぼ同じ、島民はギネスブック並みの広大な海を背負っていると岩田さんは思い続けてきた。

これらの島の存在感、活力をどのように維持し発展させていくか島の住民の気概と活動をどのように支えていけるか……。その一翼になるため、東京都島しょ農林水産総合センターでは各島や海洋に専門調査員や研究員を配して、水

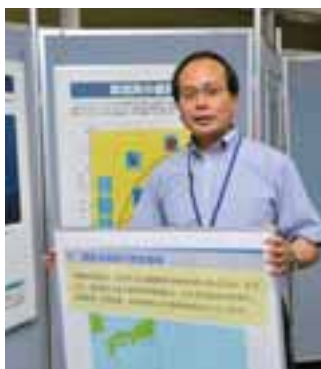
産業、農業の試験研究や普及指導に当たってきた。

同センターは、大正8年に内務省所管で「伊豆七島水産経営八丈現業場」を設置したのが始まりで、昭和3年には東京府水産試験場、吉野養殖場、大島現業場等を設置した。13年以降は伊豆諸島に「農事試験地」（後の園芸技術センター）、畜産試験場・三宅分場、戦後はこれらと農業改良普及センターの支所・分場を配して農林水産業の発展に寄与してきたが、平成17年に組織を改正、東京都の「島しょ農林水産総合センター」に統一した。本所は竹芝桟橋に近い港区海岸にあり、大島、三宅、八丈には事業所、小笠原村には水産・農業センターがある。

本誌では、平成12年の雄山の噴火で島民すべてが4年間離島、17年に帰島して島の再生発展に努力している三宅村を取材することに

した。三宅事業所は園芸・普及活動が主体で、水産は大島事業所が担っている。そのため三宅島で農業・園芸等を取材のあと、大島へ移動

「島の応援団長」を自認する
東京都島しょ農林水産総合センター・岩田哲前所長



▶右/漁へ出る準備をする漁船(阿古漁港)。雄山の山麓は樹木が枯れている
左/レザーファンを栽培する菊地さんと秋山所長(左)



して、伊豆の海に放つ魚介類の稚魚や藻場の設置等を見学させてもらうことにした。

三宅島——再生する自然と住民のパワー

三宅島は平成12年7月、島の中央にある雄山が噴火、火山灰が全島に降灰し、SO₂を主体にした有毒な火山性ガスが噴出したことから、同年9月に全島民が避難した。都内各地に分散して苦節避難生活を4年5ヵ月送ったが、平成17年2月に念願の帰島を果たした。その非難生活中も漁師たちは下田の仮住まいから伊豆の海へ出て漁を続け、農家の人たちは市民農園等でアシタバ等を育ててきた。

火山性ガスは徐々に減少しているが、風下に当たる坪田地区の一部はいまも「高濃度地区」に指定され、常住が禁止されている。

飛行機は欠航が多いため東海汽船のフェリーで島へ。朝5時に三池港に着くと、民宿「新鼻荘」の女将が車で出迎えてくれた。釣り客も数人乗船していて、彼らは宿で弁当を受け取ると早速海岸へ出かけていった。

「三宅では海岸や埠頭でどんどん釣れるよ」と客の一人が言い、「魚をもらいすぎて困ることもあるんです」と女将が笑う。

アカコッコの棲む森にも近く、宿に来る野鳥は餌を人の手からもらう。午前9時に徒歩約5分のところにある島しょ農林水産総合センター三宅事業所へ出かけた。坪田地区のは

ずれ、島の東部にあり、道路脇には山桜やフェニックス、藪椿、オオバヤシヤブシ等の巨樹が青葉を茂らせ、木漏れ日の下にはアシタバが艶やかな葉を広げている。関東

では見られなくなった桑の木がここでは巨樹となり大きな実をつけているのも驚きだった。

出迎えてくれて島の各所を案内してくれた秋山清所長(49)は、今年4月に所長として赴任、農業普及員の任務も担っている。三宅には以前から何度も来ており、普及活動のため御蔵島へも時々出かける。

「我々は噴火が落ち着いた時期に来て火山灰を持ち帰り、それが植物にどう影響しているか、堆肥や腐葉土を混ぜたりして調べてきました。17年には住民の帰島より一足早く島に入り、復興準備を開始し、三宅の特産品であるレザーファン、アシタバをはじめいろいろな野菜や果物の栽培試験を続けています。山の木々は火山ガスで枯れて白骨化していますが、下の方から新しい芽を出し再生しようとしています。生きようとすると植物に自然の逞しき、生命力をひしひしと感じますね。それが島民にとっても励みであり、パワーをもらっていると思います」と秋山さんは言う。

三宅事業所の瀟洒な建物の横には園芸試験ほ場があり、前の畑では野菜の露地栽培も行なわれている。また島内数か所に試験区を設け、火山ガスの発生状況とガス耐性のある花き・切葉かどうかを調査している。

三宅事業所に勤務しているのは所長と2人の研究員、農園芸員の5名。農家の人もこれだけ野菜や果樹を栽培するのは大変だろう



▲三宅事業所の建物
▶火山ガス高濃度地区のため居住が認められていない坪田地区
◀同じ坪田地区でも東部大路池周辺は被害がなく巨樹の森は野鳥の宝庫。天然記念物アカコッコの生棲地でもある



右／三宅事業所の園芸施設で研究員の沼尻、伊藤さん
左／秋山所長



に、作物への火山ガスの影響を詳細に調べたり、土壌診断、病害虫状況等をデータに取って分析、それらを基に農家へ技術指導に出かける日々を分担しながら行っている。

火山ガスの影響が少ない園芸品目を

「ガス被害は、昔から海風の強い風上の地区の方が少なく、風下で住みやすかった市街地の方に発生しています。園芸品目では切葉のレザーフアンが最も被害を受けやすく、2・0

ppm以上のガスが発

生すると葉は黄ばんだり枯死したりします。

しかしガス被害の少ない地区で栽培すれば被害が少ないことがわかりました」

研究員の沼尻勝人さん(32)と伊藤綾さん(28)に、隣接する試験ほ場に案内してもらった。ハウスが7棟あり、切り花・切葉としてカラー、リコリス、ルスカス等が栽培され、一棟ではパッションフルーツも沢山実をつけている。

「パッションフルーツは小笠原、八丈島で栽培し出荷されていますが、三宅でも栽培が可能で、7〜8月の観光用に販売できればと思います」と沼尻さんは言う。

三宅事業所の農業研究員として3年目になる沼尻さんは、青々と育ったレザーフアンが火山ガスで一瞬にして茶褐色になるのを見てきた。各地区毎に火山ガス濃度を計測し、切り花作物への影響を調査してきた結果、高濃度地区を除いては被害が少なく、栽培が可能であると自信を持った。同試験場には数年前に定植したレザーフアンがあり、太陽を浴びて艶やかに葉を広げている。

「葉は大中小と活用でき、出荷もしやすい。切り花用としては収益性も高いので、三宅の特産品にしたいと思っています」

もう一人の研究員が伊藤綾さん。害虫を研究している。

「三宅島は温暖で虫たちが生きやすい環境です。アシタバや野菜、花にはすぐ虫が付きます。商品価値を下げてしまいます。UVカットフィルムをつければ比較的被害は押さえられますが、それには設備費もかかるし、露地栽培のアシタバには難しいですね」

◀野菜栽培と害虫を研究する伊藤研究員



その日も伊藤さんはキヌサヤについての害虫を調査、小さい虫たちが新芽や実の部分に沢山発生していた。農作物にとって害虫は永遠のテーマ。特に低農薬や無農薬野菜が求められる昨今では害虫と上手に共生していくことも必要だ。伊藤さんの研究調査が楽しみだ。

地産地消で新鮮な野菜栽培を

事業所の前にある畑では、露地栽培でさまざまな野菜を栽培している。トマト、パプリカ、落花生、さつまいも、里芋等々。中でも

◀アシタバ栽培地で、沼尻研究員(中央)と園芸員の方々



た。この苗場はかつて畜産試験場のあった場所
所で、いまは牛や豚の姿は消えたが、火山ガスが鎮静し緑が戻ったら、畜産事業も再開することだろう。

三宅島を元気にする漁師たち

阿古地区の海岸に三宅島漁業協同組合があり、隣接する漁港の売店には獲れたてのキンメダイ、トビウオ、カツオ、ムロアジ、アワビ、サザエの鮮魚やくさや等の加工品が豊富に並んでいる。

噴火災害中も漁協の主力組合員たちは下田市や式根島に漁船と共に避難して漁を続けながら、都漁連内に事務所を設けて会合を重ね、帰島後のあり方を話し合ってきたという。

漁協組合長の関恒美さんは、早朝の漁から帰る、午後4時ごろに再び出航する数時間、デスクで組合の事務に当たっていた。

「私たちは帰島後ただちに漁を再開し、いまは水揚げも噴火前とほぼ同じになった。海は回復しつつあり栽培漁業も継続して行っていますが、全国的に磯焼けが進み海水温も不安定です。三人若い漁師が入村しましたが、50・60代が主体なので、今後はやる気のある漁師と後継者の育成に力を入れます」と言う。

まだ以前ほどではないが、イルカやウミガメを観察するダイバーや釣り人も訪れる。

前述した東京都島しょ農林水産総合センター岩田前所長は「漁業者や漁協の人々の三宅島への熱い思いが復興のカギになりました。我々も漁場の調査と魚介類の種苗の放流を引き続き実施しながら漁業の復興を支援していきます」と語っていた。



▲火山灰で埋まった海底



▲テングサが付着した人工礁(大島事業所提供)

大島にある東京都栽培漁業センターでは伊豆諸島の栽培漁業推進基地として、アワビ、フクトコブシ、サザエの種苗の大量生産を行い、各地の漁場に供給している。三宅島復帰に際しては、都漁連と小笠原漁連が協力してシマアジの種苗1万5000尾を無償放流した。

三宅の海にテングサ藻場の再生を

三宅島は高級テングサの代表的産地として知られ、漁獲高も多く漁業を支えてきた。しかし噴火により火山灰や砂泥が堆積したため深い海で生育するものは枯渇してしまった。

テングサ類には波打ち際の岩場に着生するオオブサと、水深3〜10mの海底の岩盤に着生するマクサがある。大島事業所の調査結果では、オオブサは常に波に洗われるため被害は少ないが、マクサは壊滅的被害を受けていることが判った。

そのため海底から垂直に伸びたコンクリートの先に特殊繊維をつけた「マクサ人工礁」を考案した。浮遊するマクサ藻が付着する仕掛けで、生育に必要な栄養塩が多く流れのある島の北東部、沖田沖に平成18年11月に設置した。テングサの調査と人工礁造りを行ってきた。



▶アワビの稚貝を手にする滝尾大島事業所主任



▲模型で「マクサ人口礁」について語る滝尾さん



▲テングサを培養して調査する高瀬研究員
▲東京都栽培漁業センターの細野研究員。この中にフクトコブシの稚貝が育っている





▲テングサは水で洗って10日近く天日に干して色抜きする



くさや製造をする青山さん親子。
娘の恋乃美さんも大学を休学して手伝っている



文／浅井登美子 写真／小林恵

- 東京都島しょ農林水産総合センター
本所 ☎03-3433-3251
- 三宅事業所 ☎04994-6-1414
- 大島事業所 ☎04992-4-0381
- 三宅村役場 ☎04994-5-0981

た大島事業所主任・滝尾健二さん（42）から人工礁の模型を見せてもらった。実物は高さ70～80cm、幅80cmほどで、先端に軍手のネットに似たものを付けている。

「水深10mの海に10個設置しました。約2年経った昨年10月末の調査ではマクサの着生量は多く、よく繁茂しています。さらに礁を改良して事業化に繋げたいと思います。マクサを食べるサザエやトコブシが増えると海が活性化してきます。オオブサ漁も年により変動があるため、火山灰の影響を調べています」

海と魚が大好きだった滝尾さんは東京水産大学（現海洋大学）を出ると葛西の水族館で働き、8年前に大島事業所の水産研究員になった。アワビやトコブシ等を産卵から稚貝に育てる研究にも力をいれており、水槽にいる魚介類を見るまなざしはやさしい。

同所の三階では海水の栄養塩の調査、テングサの培養も行っており、プラスチックの中でテングサがゆらゆらと育っている。「培養した

テングサが、海水の栄養分や潮の流れでどう違ってくるか、育成状況を調べています」と担当の高瀬智洋さんは言っていた。

三宅島の阿古地区に漁師・山田さんが採取したテングサが干してあった。浅瀬で採取しているとはいえ、昨年採取した場所も今年は繁茂が悪い状況で、火山ガスによる樹木枯れが泥流となって海に注ぐ影響が生じている。噴火前の最盛期に比べるとマクサの漁獲高はゼロに近く、オオブサも1/20程度。漁協では10月から翌年3月までを禁漁にして資源保護に当たっている。

採取したテングサは天日に干し水をまいて一週間から10日間ほどさらして塩と赤味色を抜き、品質を整えて出荷する。手間はかかるが三宅産は高級テングサとして人気がある。

伊豆諸島名物のくさやも新しい手法を取り入れながら再開した。三宅で人気の清漁水産を訪ねると、社長の青山敏行さんと娘の恋乃

実さんが、届いたばかりの青ムロアジを見事な包丁さばきで開いている。秘伝のタレは4年半の離島でダメになったが、知り合いから分けてもらい、徐々に店の味に蘇らせたという。

手伝っている恋乃美さんは青山学院大学の3年生だが、今年一年休学して父親と新製品の開発に当たっている。その新製品が「青ムロアジのすり身」。他に人気があるのが「焼くさや」というパック。焼いて食べやすく刻んだくさやアジに乾燥してチップ状にしたアシタバが入ったもので、味も香りもよく酒肴やお茶漬けにぴったり。三宅の復興と伝統のくさや製造に凛と取り組む父親の姿を見て育った娘は、その父親から学びながら仕事を手伝えるために一年間の休学を決意をしたのだろう。私たちが失いつつある家族の絆を見る思いがした。

「焼くさや」の箱には「ご支援ありがとうございます。三宅島は元気です!!」とプリントした紙が貼ってあった。

■活力ある地場産業の振興を②

心にも豊かな森林を育てる

長野県林業大学校／木曾南部森林組合（長野県木曾町・大桑村）

県土の約8割が森林、その3分の2が民有林である長野県では、林業の近代化を推進、専門的知識や技術を持った林業の担い手を育成するため、昭和53年12月に長野県林業大学校を開設した。少数精鋭の全寮制学校で、同校を卒業した若者が全国各地の森林や地域で活躍している。今年も20名の新入生を迎えた林業大学校と、同校を卒業して森林組合で働く人々を取材した。

心の中にも森を育てる全人教育を

木曾地区の伝統工芸の街として賑う木曾福島駅から徒歩約30分、開田高原へ向かう国道361号沿いに長野県林業大学校がある。二年制、一学年20名という狭き門の専修学校であるため、校舎というより研究所的な建物である。事務室、講師室、各教室が並ぶ

本館棟と講堂のある別館棟、その裏手に実習棟と寮や食堂棟が機能的に配置されている。

県から昨年異動してきた岡沢雅孝事務長が学校の概略を説明してくれたあと、主な施設を案内してくれた。

「開校して30年、同じような大学校は他に5校ありますが、全寮制の学校は少ない。木曾には技術専門学校もあり、40・50代で学ぶ生徒もいますが、当校では入学資格は限定していませんが、現在は高校卒か短大卒の学生だけです。全寮制のため、年齢が同じ位でない寮生活は難しいと思います。寮生活は思ったより楽しいようで、卒業してからも生涯の友として交友している学生が多いようです」

訪ねた時は昼休み時間で、食堂では学生と教師らが和気あいあいと給食を楽しんでいた。メニューはチャーハンとあさりの味噌汁、サラダ、卵豆腐。食事をしてきた服田習作さんと湯沢晃一さんは共に長野県出身の2年生。「食事の不満はないですね」と言って、食事を終えたあと自分たちの部屋も見せてくれた。現在3人で住み、床もワックスをかけて身ざれいになっている。各自に大きな机があり、本



林業大学校を昭和60年3月に卒業、木曾南部森林組合に勤める長岡さん、数年前に間伐したヒノキ林で



上／長野県立林業大学校の校舎
下／林業の体験学習に使う森と校庭



実践力のある若者を育てたいと語る倉沢校長

等が多いのが印象的だ。
 午後の授業は、1年生は救急救命について赤十字の指導員から4日間学ぶ。山での作業には予期せぬ怪我也多いので、その対処法をしつかり身につけるのだという。2年生は広い実習棟でワイヤスパイスの実技。ワイヤは機器と連動して材木を搬出する作業に不可欠。授業では、幾重にも編み上げている鋼鉄のワイヤロープを叩いてほぐし、円形に組み直す作業をしていた。見ると女子生徒も二人いる。卒業して森林作業に従事するつもりかと聞くと、公務員になりたいと言う。同校は卒業すると国家公務員Ⅱ種の受験資格が得られるので、それが人気でもあるらしい。

に必要な運転技能資格が数々取得できる。また学生にとつては、1学年では屋久島へ、2学年では西アメリカ、セコイア国立公園への研修に行き、林業体験をしてくる(21年度)のが最大の楽しみようだ。
 倉沢明人校長は「当校は全人教育をめざしており、林業を教えるという姿勢ではなく、林業や地域、自然のことを体で学んでもらうこと、頭でつかちでなく実践力のある若者を育てること。創立以来規律を重んじる全寮制を続けていますが、同じ釜の飯を食べると相手への思いやりや許す心、チームワークの大切さを学びます。専門知識を身につけると共に人間性が豊かで、将来林業や地域社会を担っていく若者になってほしいと願っています」と語る。

卒業後の進路は、地方公務員や国家公務員になる人が43%を占め、続いて民間企業が29%、林業関係団体への就労は18%。編入試験を経て信州大学等の四年制大学へ進学する学生もいる。林業関係への就職が意外と少ないが、他学校の学生と比較すると、地域社会に関わる仕事に従事する生徒の比率が高いといえる。

「現在学生は秋田、岩手、鹿児島からも来ており、在校生38人の内で長野県出身者は22人と6割弱です。しかし当校は長野県が県民税等で運営していますので、県内の学生にもっと入学してほしいと各高校へ呼びかけています」
 授業料等は、一、二学年とも寮費・給食代を入れて年間88万円。県内の私立大学の初年度納付金の平均33.6万円、短大の120万円と比較しても大変安い。

カリキュラムを見ると、1年では哲学、心理学、文学から法学、社会学、経済学等の一般教養を学び、同時に造林、測量、森林生態や保護、樹木医学等を講義と実習で学ぶ。2年になると治山工学や林業機械学等の実習が増え、卒業と同時に林業専門士等6つの資格が得られ、試験に合格すると森林や建設作業



▲友情を育む寮生活
 ▶ワイヤを用途に応じて結び直す実習をする2年生。男性に負けないで頑張る女子学生(下)
 ▼製図室。図面づくりもコンピュータで



▲1年生は救命救急について学ぶ
 ▼林業で使用する機器類。操作の仕方を学び資格も取得





木曾川沿いに広がる大桑村
下/山へ測量に出かける田上さん、中村さん



市民を対象にした公開講座も

林業大学校では講師に大学の教授、専門研究機関の主任研究員等、各分野のそうそうたる人が当たっているが、そんな中、開校を推進し、毎年学生に講義を行ってきた只木良也名古屋大名誉教授（農学博士）の森林生態学の講義、元長野県林業総合センター所長武井富喜雄氏の材木加工学の講義は、一般の人や別の機関関係者も聞きたいという要望があったため、今年から「県民講座」として公開し、希望する人も公聴できるようになった。

また、森の不思議、森の魅力、森の楽しさを一般の人にも知ってほしいと、二カ月に一回一般住民を対象にした「公開講座」を実施している。今年5月に「食べられる山菜」、6月に「桜の話」を講師の指導で山や里山へ出かけて実施、7月以降は「巨木について」「御岳の森林限界」「きのこ狩り」講座が予定される。

ている（参加費は保険料の実費のみ）。さらに通年講座として信州大松田松二名誉教授の仏像造り等が、講堂で月二回実施されている。学生たちは地域活動にも参加、学校周辺に花を植えたり、祭りや行事に総出で参加するなど、地域の人々にとっても頼りになる頼もしい存在になっている。

木曾ヒノキの育成と森林環境の保全

林業大学校の卒業生・長岡功さん（45）を、大桑村にある木曾南部森林組合に訪ねた。「道の駅大桑」の建物の中に事務局があり、長岡さんは業務課長として森林業務の受託と作業計画の策定、山で働く人たちの指導等、組合業務のリーダーとして多忙な日々を送っている。

「親は公務員（のちに村長）、林業の経験はなく普通高校を出たのですが、父が林業大学へ行けと言うので入学しました。昭和58・59年

と学び、60年4月に村の森林組合に就職しました。学校までは車で20分、通学できる距離ですが、寄宿生活。2年間で専門的なことを徹底的に学びますので、夜も勉強することが多く、有意義な二年間でしたね。初代校長は京大出身の市川圭一教



道の駅大桑の中に森林組合事務所がある

授で、その後輩に当たる信州大の先生方や林業センターの研究員の方々など、森への造詣が深く教育熱心な先生が多かった。林業の大切さや森林の魅力を学びました。その教えがいまでも仕事に生きています」と長岡さんは言う。

木曾南部森林組合は上松町と大桑村の森林業務を行っており、森林の総面積は約1万haと木曾地区の中でも広大。国有林が約半分を占め、民有林には1072名の組合員がいる。現在森林組合の職員は現場関係が11名、事務が5名、他に組合が委託する森林作業員が10数名いる。

これから山へ測量に出かけるという田上猛士さん（28）も林業大学の卒業生。先輩の中村照彦さん（40）と組み、スパイク付きの地下足袋にキハンを巻いた出で立ちで山へ出かけて行った。長岡さんも国有林の間伐作業をしている現場へ指導と打ち合わせに出かけるといので、我々も同行させてもらった。

「林業というと今までは木材として優れている樹を育てて高く売るといったことがメインでしたが、最近は地球温暖化防止の役割が増えて仕事も多様化してきました。間伐した森は広葉樹林との混合林にする、間伐の進まない個人の林も助成金制度を利用して手入れしやすいように書類作成から手伝っています。間

と学び、60年4月に村の森林組合に就職しました。学校までは車で20分、通学できる距離ですが、寄宿生活。2年間で専門的なことを徹底的に学びますので、夜も勉強することが多く、有意義な二年間でしたね。初代校長は京大出身の市川圭一教

伐は形状が悪い細い木が中心で、林道がない山では倒木して土に戻っています」

車が山林へ入っていくと両側に手入れされたスギ、ヒノキの林が広がり、空気がひんやりしてきた。里に近い山は民有林が多く、標高1000mあたりから国有林になる。

「木曾ヒノキは全国的にも最高の材だと自負しています。日中は30度を超えますが、朝夜はぐんと冷える。寒暖の差や厳しい冬の寒さが独特の色と艶、芳香のあるヒノキを育てるんです」と長岡さんは言う。

樹齢80年から100年の木材をいかに出せるかが決め手のようだ。木曾地方は古くから木材の生産と加工を主産業としてきた土地であるため、森林組合は木を市場に出荷するまでが業務、加工は加工組合が担っている。

長岡さんが車を林の奥まったところに止めた。これから約30〜40分ほど歩いた国有林の山頂付近で4、5人の人が間伐作業をしているという。まず伊奈川の支流を二本渡る。川幅は狭いが流れは激しい。一つの川には細い鉄板を敷いて渡りやすくしてあるが、もう一つの川では岩をぼんぼんと飛び越えていくしかない。決死の思いで渡ると、道はいきなり45度もある急斜面になった。

青息吐息で斜面を登る我々に対して長岡さんはカモシカのような軽やかな足取りだ。あと山頂まで3分の1というところで、私たちは下りの大変さを考えて同行を断念した。ひと息ついて見渡すと、数年前に間伐したというヒノキの森は明るく、ミズナラやモミジ、ホウノキ等の巨樹もあり、足元には山百合、ホタルブクロ等の可憐な山野草も咲いている。

これから作業員が働く国有林へ指導に出かける。川も急斜面のけもの道も身軽に超えていく長岡さん



山から無事下って飲んだ川の水の美味しかったこと。

愛知県民の水源地として

大桑村には7つの電力用ダムがあり、また木曾川は愛知県民の大切な水源地になっている。村内には木曾川に注ぐ河川が10本ほどあり、美しい渓谷の観光名所も数か所ある。

「愛知県民は水道代に1%加えたものを水源



▶御岳山系、木曾駒ヶ岳の豊富な水源が幾つもの川を作り、愛知県民に飲用水を提供している。

地保全費として支払い、これが村の財政の一助となっています。この恵まれた森林と水源地の保全を次世代にしっかり継承していくことが私たちの大切な仕事の一つだと思っています」と長岡さんは言っていた。

道の駅には春から初夏の山菜、ワラビ、山ウド、ホウバ等が並び、人気を博していた。

文／浅井登美子 写真／満田美樹

●長野県林業大学校 ☎0264-23-2321
●木曾南部森林組合 ☎0264-55-3801



■活力ある地場産業の振興を③

地域のみなさんに支えられ、和紙職人をめざす

(島根県浜田市三隅町)

石州和紙の産地として名高い島根県浜田

市三隅町。他の伝統工芸と同様、石州和

紙の世界も深刻な後継者不足に悩んでいる。打開策として、(財)ふるさと島根定



「紙子」の作業をする村子さん。漉き舟の紙料を箕の中に素早くすくい上げる

住財団が平成8年から実施しているのが、U・Iターンの支援事業の「しまねの産業体験」だ。助成金を受けながら産業体験を行い、和紙職人の道をめざすUターンの人々たち取材した。

支援制度で後継者をバックアップ

平成21年9月末、ユネスコが初めて作成する「世界の代表的な無形文化遺産リスト」に石州半紙が登録される見通しだ。

「後世に伝えるべき世界的な文化財」と認められる石州半紙。だが、その制作技術を受け継ぐ職人の数は年々減少しているという。

三隅町の「石州和紙久保田」3代目、久保田彰さんによると、

「昔は、副業としてほとんどの農家で行われていたのですが、洋紙の普及などによって激減しましたね。明治27年には紙漉き農家が6377軒あったのですが、現在、三隅町に4戸、津和野町に1戸、桜江町に1戸。石州全体でも6戸だけとなりました」

そうしたなか、平成8年に「U・Iターンのための産業体験者助成制度」がスタートした。これは、島根県にU・Iターンし、農林水産業や伝統工芸

などの産業体験を行う場合に、滞在に要する経費の一部を助成するといふものだ。

「実は12年前、うちの工房に岡山県出身の女性が紙漉き職人になりたいと言って訪ねてきましたね。そのとき初めて、旧三隅町に掛け合い条例



久保田彰さん(中央)のもとで修業する中島久夫さんと村子香織さん

を作ってもらったんです。そうして、1年間
は島根県の定住財団から体験事業の助成金
5万円を、2年目、3年目は旧三隅町が生活
費の一部11万円を助成してくれることになっ
たのです。うちでは、12年間で6人の職人さ
んがこの制度を利用しました」と久保田さん。
ちなみに、島根県全体では、12年間に、累
計で1194人が産業体験期間を終了。こ
のうち、体験終了後も県内に居住している人
の数は累計で569人、終了後の定着率は
47.7%だという。体験者の年齢は20歳代、
30歳代が多く、合わせると80%近くを占める。
また、産業体験を受け入れている「受け入れ
先」は累計で281件。このなかの一軒が久
保田さんということになる。

ブータン王国に石州和紙の技術指導

ここで石州和紙の歴史について紹介しよう。
石州和紙は、島根県の西部、石見地方で漉か
れている和紙のことで、8世紀初めにはすで
にこの地で紙漉きが行われていたという。江
戸時代には津和野と浜田の両藩が製紙を奨励
したことから、盛んに作られるようになった。
石州和紙は、楮コウゾ、ミツマタ、雁皮を主原料
に、「流し漉き」とよばれる独自の技法で作ら
れる。ことに、地元で栽培された良質の楮を
使って漉かれる石州半紙は、折り曲げても簡
単にはちぎれない強靱さが特徴だ。江戸時代
には、大坂商人たちが帳簿用紙として重用し、
火災の時には、いち早く井戸に投げ込んで保
存を図った（水に濡れても破れない）といわ
れる。この丈夫さが買われ、現在は、おもに
文化財の襖や屏風などの修復に使われている。



▲楮とミツマタの畑を案内してくれる久保田さん
◀楮をまっすぐに育てるため、新芽を採る村子さんと中島さん
▼大きな箕を自在に扱う村子さん
天気の良い日は工房前に干し板を並べ、紙を乾燥させる(下)

石州半紙は、昭和44年4月に工芸技術分野
として最も早く、国の重要無形文化財に指定
された。現在、三隅町内では石州半紙技術者
会（川平正男会長ら4軒5人）がその技術を
継承している。特に、久保田彰さんの父、保
一さん（一昨年に他界）は、昭和42年の発足
以来、技術者会をリードし、石州和紙の普及
に努めた。また、「日本の優秀な技術を取り入
れて、紙質を改良したい」というブータン王
国の依頼に応じ、昭和61年、保一さんらが現
地入りして技術指導。海外技術研修生の受け
入れも始めた。石州半紙がユネスコの無形文
化遺産候補にリストアップされたのは、こう
したブータンとの国際交流が認められたこと
が大きい。

生活も人間関係もゼロから。人の助けがあった

久保田さんの工房で、平成15年から和紙職
人として働いている村子香織さんに話を聞い
た。村子さんは大分県出身。大学時代は考古
学の勉強をしていたが、4年生の時、紙漉き



職人になりたいと思うようになる。

「なぜ、紙漉きに憧れたのかとよく聞かれるのですが、明確な理由はないんです。ただ、後に気づいたことですが、大学時代、文化財の修復に和紙が使われていた場面をよく目にしていたんです。それが潜在意識にあったのかもかもしれませんね」

修業先を探すため、村子さんは卒業後、1年かけて西日本の和紙の産地を回った。そして6番目に訪れた久保田さんの工房で、初めて「修業するならここだ！」と感じたという。「理由の一つは、他の紙漉きの産地は研修期間が短かったのですが、三隅町では体験期間が3年あり、その間、助成金を出してもらえます。じっくり腰を据えて勉強したいと考えていた私には理想的でした。また、職人さんと一緒に仕事をしながら技術を身につけていくスタイルも他の地域にはありませんでした。さらに、ここでは紙漉きだけでなく、原料である楮の栽培など、紙作りのすべての工程に関われることも魅力でした」

こうして、平成15年の4月に三隅町に移住した村子さん。最初の1年はわけがわからないうまま過ぎたという。肉体労働を伴う紙漉きの修業は、女性の身には辛かったのでは？と尋ねたら、物づくりが好きで選んだ道だから、大変でもやめたいと思っただけではないという答え。

「原料である植物が、皮の状態になり、液体になり、やがて紙になる。その瞬間、瞬間に立ち会えるのは何ともいえない魅力です。それに、村の人が『よそから来て、よう頑張つとるね〜』と言って励ましてくれたり、野菜を

分けてくれたり、とても親切にしてくれます。生活も人間関係もゼロからの出発だったので、人の助けが何よりありがたかったですね」

第二の人生を和紙づくりに賭ける

久保田さんの工房にはもう一人、今年6月から修業をしている男性がいる。ここに来るまで大阪府豊中市の図書館の司書だった中島久夫さんだ。彼は、定年退職後の第二の人生として紙漉きの道を選んだ。きっかけは、平成8年11月26日の朝日新聞の記事だという。

「それは、会長さん（保一さん）がブータンに紙漉きの技術指導をしているという内容でした。私は趣味で書道をしており、自分で漉いた紙に書を書きたいという夢があった。それで、翌年の5月にここを訪ね、紙漉きの修業をしたいとお願いしたので。でも、会長さんは定年退職まで待つように、と言われました。それでもあきらめない私に、そんなにやりたいなら休暇を利用していらっしゃいと言ってくださいだったので」

それからというもの、中島さんは毎年一〜二回、長期の休暇をとって三隅町に通い、保一さんに就いて紙漉きの修業をした。

「結局、10数年間通い続けたんですよ。そして今年の3月、晴れて定年退職したので、6月からここで働かせていただいています。実は、妻は反対しているんですが、止めるのを振り切つて来てしまいました。ですから単身赴任なんです（笑い）」

「U・Iターンのための産業体験者助成制度」には年齢制限がないので、中島さんも補助金を受けられる。中島さんのように60歳を過ぎ



た人を支援しても、後継者育成にはつながらないのでは、という見方もある。しかし、彼らは石州和紙の応援団のようなもの。応援団を育てるのも和紙産業を活性化する上では大切なことにちがいない。中島さんは言う。

「私に定住を決意させたのは、金銭的な支援以上に、人とのつながりが大きかったですね。この10年間に役場の人やホテルの人にずいぶんお世話になりました。また、会長さんがとても尊敬できる人だった。会長さんがいなか

▶昨年10月にオープンした石州和紙会館。この設立にも久保田保一さんが尽力した

▼耐熱・UV加工を施したアクリル板に和紙を張り、タペストリーを制作する佐崎裕子さん



つたらここにきていないかもしれませんね」
**人との出会いが導いた
 和紙クラフトづくり**

三隅町の教育・文化・健康づくりゾーンであり、石州和紙会館が建つ三隅中央公園。その園内の一角に、三隅町出身の日本画家、石本正の作品を収蔵・展示する「石正美術館」がある。

5年前、横浜市から三隅町へ移住した佐崎裕子さんは、この美術館内にある喫茶&和紙工房「紙遊（カミュ）」で、接客の合間に石州和紙を使ったクラフトを制作している。

佐崎さんがこの地に移住したのは、(財)ふるさと島根定住財団の事業の一つ「ふるさと体験ツアー」に参加したことがきっかけだ。「初めて三隅町を訪れたのは10年前。最初は、三隅町に嫁いだ友人に誘われて、遊び感覚でやって来たんです。ところが、来て見たら海

も山も近いし、妙に空気感が合う。すっかりこの町が気に入って、以来、毎年訪れるようになりました」

当時、ツアー参加費は、3泊4日で1万円(三隅町までの交通費は自己負担だが、宿泊費、食事代、体験費用などすべて含む)という破格の安さだった。そのため、佐崎さんは、定住する気持ちがないのに何度もツアーに参加することに後ろめたさを感じたという。

「でも、スタッフの川神さんが『島根の応援団になってくれたらいいのだから』と言って、いつも温かく迎えてくれました。それで、春秋2回のツアーのほか、自費で他の季節も訪ねるようになり、5年ほど行き来するうち、ここで暮らそう、という気持ちになってきました」

ちなみに、川神さんは「紙遊」の代表であり、産業体験の受け入れもしている。運よく、その工房のスタッフとして働けることになり、佐崎さんは移住を決意。3年間は産業体験者助成制度に則って支援金をもらうこともできた。

「支援制度はたしかに移住を決意するポイントになりました。でも、私の場合、支援制度以上に、この地域の人とよい人間関係が築けていたことが大きかったですね。特に、川神さんという懐の広い方に引き受けてもらえた私はとてもラッキー。2年前に弥栄町(隣町)の男性と結婚したんですが、将来、弥栄町に引越しても、和紙と関わっていききたいし、ここで育んだ人間関係も一生続けていきたいと思っています」と佐崎さんは言っていた。

文／小田礼子 写真／岡本良治



●石州和紙久保田
 ☎0855-32-0353
 ●石州和紙会館
 ☎0855-32-4170



▲イタリアの教会をイメージした石正美術館。三隅町出身の日本画家、石本正の作品を収蔵・展示している
 ▲佐崎さんが制作した和紙の照明
 ▶川神さんが制作した和紙の人形

地域医療の再生とまち創り「夕張希望の杜」

「村上スキーム」に共感する医師たち／都庁から来た義勇軍（北海道夕張市）



▲炭鉱で栄えた夕張を語る夕張歴史村



▲夕張希望の杜、医療センター建物



▲診察を終えて会計をする患者たち

あえて行政や住民
意識を問う

北海道一の炭鉱町だった夕張市の人口は現在6198世帯、1万1574人（5月現在）。炭鉱最盛期の12万人、財政破綻前の約3万人と比較すると大幅減だが、「これで北海道の平均都市並みに落ち着いた」と村上医

師は言う。

630億円の借金をかかえて財政破綻した夕張市は、多くの市民が去り高齢化率43%、市では日本一になった。破綻した市立総合病院は公営民営の診療所として再出発することになり、管理運営を引き受けたのが村上智彦医師。支援する人々と「医療法人財団夕張希望の杜」を立ち上げ、医療と老人保健施設等の運営に当たっている。財政破綻や地域医療の危機は全国各地にも押し寄せており、夕張市はその縮図。村上医師は不満を言い依存ばかりしてきた住民意識を変えることも大切と訴える。

一方、3分の1に激減した市職員を助けようと東京都からは、義勇軍が来市して、行政業務に当たり、地域おこしにも新風を注いでいる。

夕張市の栄華期を象徴する石炭歴史博物館や市庁舎のある市北部に、平成19年に設立した医療法人財団「夕張希望の杜」夕張医療センターがある。といっても施設は旧市立総合病院をそのまま活用したもので、医療センター「夕張診療所」では、内科、外科、心療内科、リハビリテーション科、歯科があり、他に派遣医師が週一回診療する整形外科と眼科を有する以前同様の大規模施設。医療センターの奥二階には19床の一般病床があり、スタッフはパート職員を入れて総数59名。また一階には40人が入所する介護老人保健施設「夕張」があり、看護師、介護福祉士等25名（パート含む）が働いている。

これを率いる村上智彦理事長（48）は地域医療まで破綻させるわけにはいかないと指定

▶「夕張希望の杜」理事長の村上智彦医師、研修室で。壁には医療状況や目標等がパネルに張り出している



入院患者を見舞う村上医師



車椅子での送迎の他、センターまで無料送迎バスを毎日運行している

管理者公募に応募し、支援する人々と「夕張希望の杜」を立ち上げた。

北海道生まれ、北海道薬科大学、同大学院を出て薬剤師や臨床検査技師の資格を得たあと金沢医科大学を卒業、自治医大で地域医療を研修、岩手県藤沢町、北海道瀬棚町、新潟県湯沢町で医師として地域医療に当たってきた。地域医療問題の旗手として注目され、講演依頼も多く超多忙な日々を送っているが、当誌のために時間をさいてくれた。

「夕張って僕が勤務していた越後湯沢と同じで、豊かな自然と、温泉ありスキー場ありで素敵なまちですよ。湯沢は民間が開発したけど、夕張は公が開発

したから失敗した。この人たちは公的サービスを受けるのが当然という意識の人が多かった。1万2000人のまちに300人以上の市職員がいたんです。公務員は1/3の仕事で他より高い給与

を受け、住民は他所より高い年金を取り、皆が口を開くと『困った』『困った』『くれくれ』と言ってきた。住民も炭鉱

等で高給で働き、閉山後も保障を受けて暮らしてきたので、自から努力して自立することが少なかつた。財政破綻したことで普通のま

ちになつたんです」と開口一番辛辣な言葉。「マスコミも駄目だね、医療のことはなにも知らず、夕張市民は可哀想という発想でしか取材しない。医師たちは必死で頑張っているのに、何かミスがあると医療関係者を叩くことに熱中する。これは夕張だけの問題ではありませんが、住民が依存心を捨てもつと自立する意識、医療でいえば自分のからだは自分で管理するという習慣を持たないと、地域も医療も崩壊してしまいます。先端を切るかたちで破綻した夕張市は日本の縮図ではないかと思

い、あえて私は言いたいことを言うことにしました。私たちは最悪の条件で地域医療の再生をはじめましたが、医療の継続だけではなく、まち創りの視点で取り組んでいこうと思つています」と村上医師は語る。

地域医療の先進地や、医療ミスを指摘されて崩壊してしまった医療システムの例など、具体的にいろいろ聞くことができたが、スペースの関係で省略する。

医療センターにはCTや透視診断装置等の設備も完備しているが、高齢者の多い夕張市では高度先端医療に依存するのではなく、予防とリハビリテーション、ケアに比重を置いている。意外と高齢者に多いのが歯槽膿漏や口内炎で、歯を治療して美味しく食べられるようにすることが大切だと歯科部門を充実し、他の老人福祉施設へも診療に出かけている。村上医師は入院する患者を見回つたあと、元病院だった施設を案内してくれた。中廊下

朝8時30分から医師や看護師、事務員が集まって朝礼集会



をはさんで両側に20数室がある広い建物であるため、今は三階は閉鎖して電源も切つて未使用。「冬はマイナス10度になるため暖房費が大変です。昔この廊下には炭鉱爆発で沢山の遺体が並んでいたことがあつたそうですよ」とおどけて笑わせるが、実は老朽化した施設の維持管理が大変で、5000万円にものぼる水道光熱費が経営を圧迫していることを後で知つた。

地域医療に関わる医師や研修医の拠点

翌日朝8時30分、医師や看護師、事務員は二階の研修室に集まって朝礼と昨日の医療報告、今日の主な業務を確認しあう。理事長の村上医師は今日は別の町村へ医療に出かけている。2月より頼まれて無医地区等へ助っ人に行くようになった。

報告等が終わると全員で壁に張り出された「OUR DREAM」と「基本理念」を読む。



宮崎から来た森田医師 訪問診療を終えた田谷医師(右)と清水医学生

「みんなが誰かのために、誰かがみんなのために夢を持って働く希望の杜 みんなの夢を現実に変える町づくりに挑戦しよう」(O U R D R E A M)、「地域の人々に信頼される医療福祉サービスの提供を通じて安全安心な町づくりに貢献しよう。専門職としての誇りと夢を持って自己実現を目指そう。自らの生活の基盤は法人の安定運営にあることを理解しよう」(基本理念)

「わかりやすい普通の言葉でしょ。でもそれを実践していくのはけっこう難しい」と村上医師は言っていた。

「村上スキーム」という言葉があり、医師仲間では何気なく使われているという。この言葉は、開設当時副院長をしていた高橋氏に誘われて東京から来た佐藤事務局長が使いだしたもので、「高齢社会における地域医療、地域社会モデル構築の枠組み」というような意味があり、スタッフ一人ひとり

が各自のモデルを構築していくことが狙いだという。

医療センターのスタッフの約半分は旧夕張総合病院からの引き継ぎだが、村上医師の理念や理想に共感して夕張医療センターにやってきた医師や看護師、技師も多い。田谷智医師は和歌山の大病院等で働いていたが地域医療を学びたいと夕張へ見学に来て、数年の予定で働いている。長野県佐久総合病院からは若月院長の下で地域医療を学んできた永森克志医師が来た。「普通の医師が誰でも取り組める地域医療をめざす」という村上医師の言葉を聞いて夕張移住を決意したという。

森田洋之医師は一橋大を出て企業に勤めたあと地域医療を担いたいと宮崎医大へ進学し直した人。「センターへ来てダイナミックに働く村上医師らの姿を見て、夕張へこようと決めました」近くの市営住宅に住む。寒さを心配したが、防寒設備が整っているので家の中はこの方が温かい、と家族にも評判がいいと言う。

在宅医療を支える

医療センターは午後も開業しているが、午後からは医師と看護師が交代で在宅診療、在宅介護に市内へ出かける。駐車場に停まっている車を見ると他県のナンバーがよくある。夕張にきたスタッフの多くが、前に使っていた車を夕張に持ってきたためのようなのだ。

その日同伴させてもらった田谷医師は和歌山ナンバーの自家用車。「これからも夕張にいてポンコツになるまで乗るのかな」と言っていて、金沢医大からきた医学生、清水連さんを

乗せて近くの市街地へ診療に出かけた。

往診するのは60代後半の元飲食店経営者で奥さんと二人暮らし。車椅子なら10分足らずで診療所まで来られるが、目が悪いので動きたくないとのこと。医師は月2回往診し、看護師が週1回ケアに訪れている。田谷医師らは二階にある住まいへ非常口から訪問、約30分ほどで戻ってきた。ちなみに5月の訪問診療は152件、訪問看護は73件、訪問歯科が22件、デイケアが104件となっており、在宅医療の割合が高い。他に急患救急に備えて医師と事務員が夜勤し、夜間に往診に飛び出すこともある。広大な面積を持つ夕張市には夕張メロンで知られる滝ノ沢、滝の上地区等南部地区が人口も多い。道路網は整備されているが冬の往診は大変だなと実感した。

都庁からは若手職員が体験研修に

夕張医療センター「希望の杜」の近くにある公園で草刈りをする若者たちがいた。東京都から5日間の日程でやってきた都庁若手職員の6名だ。慣れないチェーンソーの操作も上手になって、昼前には公園は美しい草原になった。明日からは夕張メロンの収穫や選果場での作業を手伝う。

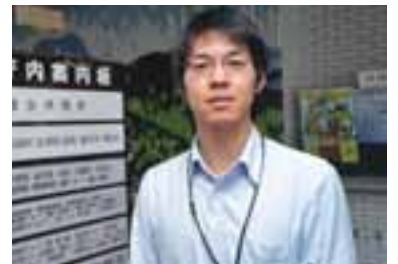
東京都では、昨年1月より財政破綻した夕張市を支援しようと若手精鋭職員を夕張市役所へ派遣している。

二年間の任期で派遣された鈴木直道さんは、市民課市民保健グループでの日常業務のほか、NPO法人ゆうぱり観光協会でもイベントの企画・運営から広報活動まで幅広く担っている。市内団体だけでも7つの団体に所属して



右/夕張市へ体験研修にきた都庁若手職員たち。公園の草刈り作業を終えて 左上/翌日はメロン農家の手伝い。メロン一つ一つに皿を敷いていく。「手間をかけて育てる、我々の仕事にも通じることが多い」と言う研修生。左下/都庁全国観光PRコーナーで夕張メロンを販売する鈴木さん

おり、日中は市内を走り回り、市役所での業務も深夜までこなす忙しさだ。
今回の都庁若手職員の短期研修を企画したのも鈴木さんだ。夕張メロンの収穫体験をした研修生6名と鈴木さんは、6月17日から一週間都庁「全国観光PRコーナー」で行われた物産展で夕張メロン等を販売した。
「夕張は財政再建計画で、市民税の引き上げ、ゴミ有料化、上下水道料金の値上げ等市民の負担も増えている。市職員の給与は全国最低、超過勤務をしながら20代後半で手取り10万円を切っています。私たちに手伝えることは精



夕張市へ派遣され保健業務や観光協会の仕事に多忙な鈴木直道さん

市の職員が107名なので、実に18%が派遣職員である。

猪瀬直樹副知事の発案で始まった都若手職員の派遣では、夕張市への支援と研修が目的だが、東京都でも6〜7年前は税収が4兆円を切って赤字だった。しかも現在のような大不況時代では何時また赤字になるか予断を許さない。夕張市は全国自治体の縮図、職員にもその自覚を持ってもらおうというもので、短期の研修では冬には雪下ろし隊が来市しているという。

一杯支援していきま
す」と鈴木さん。埼玉
出身の28歳、独
身。
都以外にも北海道
庁をはじめ、道市長
会、愛知県春日井市、
茨城県日立市など総
勢20名が支援のため
に派遣されている。

市役所近くの商店街で手作り菓子を出す珈琲店「和」の女将・中本和津江さんは、「多くの方が支援活動をしてくれて嬉しい限りですが、でも頑張りすぎてバテないかと我が子のように心配することもあります。私たちももっと自立し積極的に地域おこしに参加していかないとイケませんね」と言っていた。
石炭資料館近くには田中義剛氏経営の「花畑牧場」が工場と売店を今春新設し、夕張新名所として賑わっている。「夕張では昔お世話になったから」と田中氏が設置した工場で、



▲田中義剛社長が今春新設した「花畑牧場」。250人が雇用され、観光スポットに
▶「和」の女房は「私たちも自立しないと」と語る。下は夕張本町キネマ街道の看板



名物の生キャラメルには夕張メロンも主力で使われ、シルバー人材センターの高齢者や主婦が250人働いている。住民にとつてまたとない雇用の場となり、観光客が夕張を訪れる機会となった。
整備の進む小町キネマ街は以前より映画の看板が目立つようになり、今年は「おくりびと」を上映する等、映画祭が盛大に予定されている。また、旧北炭の社交倶楽部だった「夕張鹿鳴館」は小樽市の経済人が買い取り、改修再生して宿泊施設にするそうで、もう一つ夕張に観光名所が登場する。炭鉱都市夕張の歴史を振り返る機会になればと願う。
札幌から1時間半という地の利のよい夕張市は、いま魅力ある交流都市へと変わろうとしている。

文/浅井登美子 写真/小林恵

地域医療をプロ集団 が担う

磐梯町保健医療福祉センター「瑠璃の里」
（地域医療振興協会）
（福島県磐梯町）



上／「りんどう」一階では毎日、理学療法士によるリハビリが行なわれる。足腰の弱くなった男性が機器を利用しながらリハビリに励んでいる
下左／寛いだ雰囲気の治療センターの待合室
下右／広大な敷地に医療センター、ディサービスセンター、介護老人保健施設が一体に建つ「瑠璃の里」

磐梯山の西山麓に広がる美しい田園の町。その中でひとときわ目に
つくのが広い敷地の中に縦横に建つレンガ色の建物、磐梯町保健
医療福祉センター「瑠璃の里」。無医村から民間医院の開院、そし
て医師の死去等、医療への不安な時期を経て、町は平成12年に（社）
地域医療振興協会に運営管理を委託した。医療センターとディサ
ービスセンター、介護老人保健施設等が一体となった複合施設で
ある。

公設民営に踏み切った理由

緩やかな丘陵地に黄緑色の屋根をした1）
3階建ての建物が3棟建ち、広い駐車場には
沢山の乗用車が停まっている。午前9時を過
ぎると次々と車が来ては車椅子の方を含め患
者や利用者が施設に入っていく。敷地の総面
積は約2万㎡もあり、手前にあるのが介護老
人保健施設「りんどう」、奥まったところに
ディサービスセンター、中央に医療センター
が配置されている。

「りんどう」の入口から入館して気がついた
のは、コンクリートの建物なのに、床も壁も
暖色系の落ち着いた色で構成され、木の質感
を生かしたアットホームな感じの内装だ。医
療センターの待合室は座り心地のよいソファ
ーが円形に設置され、寛いだ雰囲気ですら
待つことが出来そう。

まず事務部長の橋純一（はしむねひとし）さんを訪ねてお話を
伺った。

「町には常住する医師がいなかったのですが、



磐梯山のすそ野に広がる磐梯町。役場や瑠璃の里等の主な施設が中央にあり、周辺は美味しいお米と高原野菜の大地、その先に猪苗代湖(左)瑠璃の里開設の経緯を話す役場からの派遣職員・橋事務部長

自治医大卒の橋本医師が昭和61年に民間医院を開業してくれました。ところが橋本医師は平成8年に死去されてしまい、町では平成9年9月に同施設を借り上げ磐梯町診療所として開設、自治医大出身の内科医師を町職員として迎え、医療体制の維持に努めました。そこから地域医療が始まったのですが、疾病構造の変化や住民ニーズの多様化、少子高齢化、介護保険制度の導入等により、長期的な視野に立った新たな地域医療体制の整備が必要になりました。平成12年4月にデイサービスセンター・在宅介護支援センターを開所しその運営を診療所を含めて地域医療振興協会に委託することになりました。

13年12月には医療センター、15年11月には介護老人保健施設「りんどう」を開設、これらの運営管理も(社)地域医療振興協会にお願いしたところです。町が厳しい財政の中で独自に優れた医師や看護師を雇い、医療機器を揃えて、医療と高齢者福祉施設等を運営していくことは容易ではありません。幸いに、橋本医師の開院で、地

域医療に力を注ぐ自治医科大学の先生方と巡り会い、自治医科大学や国県、関係機関のご理解とご協力があったこそ、今各地の自治体が導入している公設民営という体制に踏み切ることができたものと思います。ここで働く医師や看護師、理学療法士等のスタッフ約120名はすべて地域医療振興協会の職員であり、瑠璃の里では私一人が町からの派遣です」と橋事務部長は語る。

(社)地域医療振興協会とは――

地域医療振興協会(本部/東京・平河町都道府県会館内)は、すべての人が安心して医療が受けられるようにと昭和61年に創設された組織で、現在全国40カ所の病院、診療所、老人保健施設等を運営しているほか、全国の過疎地域や僻地・離島等への代診支援は年間2000日になる。同協会の医師と研修医は約600名、看護師・准看護師は1765人。同協会会長の高久史磨氏は自治医科大学長であり、地域医療振興協会は、自治医科大学を卒業した先生方を中心に構成されている。「瑠璃の里」の屋島治光医師、斎藤充医師も共に自治医科大学の卒業生で、各地の病院や診療所で働いた後に磐梯町へ赴任した。

なお自治医科大学は過疎地や僻地等の医療に従事する医師を養成するため昭和47年に創設された大学で、卒業生は研修の2年間を含めた9年間、出身都道府県が指定する地域で医療に従事することが義務づけられ、卒業後も出身都道府県にとどまり地域医療に従事することが求められているという。



副センター長兼施設長の斎藤医師



診療室で、センター長の屋島医師(左)と田部医師

当初は夜間も呼び出しが多く四苦八苦

医療センター長の屋島治光先生(45)はデイサービスセンターが開設した平成12年に赴任、斎藤充先生(44)は13年に赴任してきた。「磐梯町には橋本先生が亡くなった後時々応援に来ており、景色のよい住みやすい町だと思いました。平成12年に赴任した頃は私

▶認知症で入所している利用者
と熱心に語る介護職員



▲入所している利用者さんの和紙を使った工作教室
◀障子やミニ家具を配した広々とした個室



体制で診療等に当たっています。私の出身地のいわき市でさえ医師不足は深刻で地域格差が大きくなっています。私が来て10年近くになりますが、医師、看護師、理学療法士等を含めて後継者を育てていなくてはとひしひしと感じますね」と屋島先生は言う。

一人で、夜間も呼び出しがあり大変でした。斎藤先生と田部先生の3人体制になったのですが、田部先生は麻酔科が専門で、他病院からの要請があつたため週2回の勤務となり、現在常勤医は研修医の及川先生を含め3人

介護老人保健施設が出来てからは施設維持とスタッフの確保が大変で、しばらくは赤字だったのが、いまはこれらの課題も解消。会津若松市にも近いので他の医療機関等へ行く人もいるが、反対に他の町からここへ来る患者が多くなっており、また、介護老人保健施設入所者の7〜8割は他町村から来ているとのことである。

斎藤先生は最近、子供の父兄たちとも親しくしようと地域のスポーツ大会に出てアキレス腱を切ってしまったと苦笑する。屋島先生同様に福島県各地の病院や大学病院を経て磐梯町に赴任、週一回は脳神経外科の専門医として会津若松市の会津中央病院へ行っている。「ここへきてからは、先生にずっと見てほしいからどこへも行かないでとよく言われます。一人の患者をその生活も含めて診られるのは医師にとっても嬉しい限りです」と言う。

機能的な中に家庭的雰囲気

橋事務部長の案内で各施設を見学させてもらった。多目的に活用できるようにベッドやテーブル等を配したデイサービスセンターには、間もなく入浴や昼食、リハビリ等をする利用者がやってくる。落ち着いた部屋、ここで昼寝が出来たら最高だと思った。

3階建て、延床面積が4194㎡、ベッド

数100床の介護老人保健施設「りんどう」は、

3階は認知症専門棟。広いスペースにテーブルやソファがあり、職員が一人一人に丁寧に対応している。2階は一般棟として50人ほどの

利用者が入所していた。部屋は障子戸風の

間仕切りがありミニ家具も揃っているお洒落な和風仕立て。個室は料金がやや高いので空

き部屋もあるそうだが、東京で入所を二、三年待っている人が見たら、すぐ来たがるだろう。女性の入所者が多く、折り紙や絵画、小物縫い等が行われていた。

印象的だったのは1階で午後から始まったリハビリ。理学療法士の他に多数のスタッフが、足腰の弱くなった利用者にはパワーリハビリ機器を使った身体の機能回復訓練をしている。毎日18名が通所して来る他、入所者も順番待ちで賑わっていた。

なお、磐梯町には会津仏教文化発祥の地として注目される平安時代初期に高僧徳一が創建した慧日寺史跡があり、町では金堂の復元をはじめ史跡整備を進めている。

文／横田塔美

写真／小林恵

▼瑠璃の里の入口付近の分譲地では医師の住宅も建つ
◀会津仏教発祥の地「国指定史跡慧日寺跡」に復元された金堂





雑草に紛れて、苗木が風にそよぐキリン福岡水源の森(白石国有林)と、キリン福岡水源の森に立つ標柱

水源の森を企業と地域で守る

〔キリン福岡水源の森づくり〕(福岡県朝倉市・東峰村)

会社員と家族、小学生が参加して
毎年植林

か細い竹の支柱に寄り添うように、ヤマザクラとケヤキ、それにヒノキの幼木が、雑草に紛れて谷から吹き上げる風にそよいでいた。防鹿ネットに囲まれたこの急斜面は、平成16年に襲った台風十八号の被害を受けた福岡県朝倉郡東峰村にある白石国有林だ。

幼木が風にそよぐ姿は、これまでに三回行われた「法人の森林(もり)」制度による植林の成果である。

一回目は平成18年11月。キリンビール(株)の福岡工場と西日本統括本部、それにグループ会社の社員とその家族。地元からは「あまぎ緑の応援団」と小学5年生など約250名が参加した。二回目は19年4月に行われ約360名が参加。三回目は20年4月に行われ約300名が参加している。

植林面積は合わせて約2ヘクタール、およそ6000本の苗木を植えた。周囲の山の植生を考慮して、針葉樹と広葉樹を交互に植えるのが植林のポイントなのだ。ヒノキは、契約が終了する30年後の換金木としての役割も果たす。

「法人の森林」制度とは、林野庁と企業が、共に森林を造成、育成し、伐採後には収益を一定の割合で分け合う制度である。

福岡県朝倉市に工場を持つキリンビール(株)が、平成11年から実施している「キリンビール水源の森づくり」活動の一環として「法人の森林」制度を利用し、台風十八号の被害を受けた白石国有林の植林を実施したのだった。

キリン福岡水源の森
入口に立つ看板





▲開会式で工場長の話に耳を傾ける参加者のみなさん



▲目印となる竹の支柱の側に植樹している様子



▲手前は植樹が終わった山の斜面。まだ植えていない場所へ移動(キリンビール福岡工場より提供)

林野庁九州森林管理局と(社)国土緑化推進機構で、白石国有林の植林と育成を目的とした「法人の森林」制度の契約を結び、それを実施する企業としてキリンビール(株)が三者協働による「キリン福岡水源の森づくり」協定を、平成18年11月に締結し、1800万円の資金援助を行った。

この協定は、キリンビール福岡工場の水源地である小石原川の上流に位置する白石国有林を育成するためのもので、約12ヘクタールの面積を30年間にわたって支援することを約束している。白石国有林から小石原川に流れ込んだ水は、江川ダムに貯水され、福岡市民の水瓶にもなっている。

山仕事の苦労がわかった

キリンビール福岡工場で、契約時から水源の森づくりを担当している妹川政彦さん(54)は、地元で生まれ育ち、昭和49年にキリンビールに入社。それ以来製造現場で働いて

きた。

「環境のこともあって、ビールのアルミ缶に使っているアルミの厚さは、入社当時からすると、ずいぶん薄くなっています。しかし、缶の蓋を締める機械は、そうそう新しく入れ替えたりしない。そのためにアルミの蓋を締める際の精度は、百分の一ミリの単位で調整が必要なんです。そんな技術的なことばかりを見てきた現場で33年間。その後、水源の森づくりを担当しています」

もちろん、妹川さんも植林作業に参加した。若い時から仕事の他には剣道一筋で、地元の小学生にも教えてきた。「剣道の他にも地元との繋がりができて良かった」と、社会を見る視野が広がったことを喜んでいる。

「台風で荒れている斜面を回復しようと、一生懸命植林をやっても、振り返ると、やっているのは、ほんのちよこつとなんです。でも、やっていかないと完成しない。山で作業している人たちは、こんな苦労をされているのか

と驚きました」

妹川さんは、水源の森づくりを担当するようになって、改めて水の大切さを意識するようになったし、キリンビールが地域でどうあるべきかも考えるようになったと言う。「自由にやっているだけなんですけどね、無理せずに」



▲上/キリンビアパーク福岡の受付玄関
下/麦汁ろ過槽(手前)と麦汁受けタンク(奥側)が並ぶ、見学コースで見ることのできる工場内
▲妹川政彦さん。工場内事務棟前、現在はシンボルとなっている旧型の糖化槽が後ろに見える



朝倉森林組合の事業課長手嶋富與さん
組合事務所前で

良質のビールには 良質の水が大量に必要

キリンビール福岡工場の正門を入ると、麦汁の香ばしい匂いが漂ってきた。すぐ右手に、工場内を案内してくれる「キリンビアパーク福岡」がある。平日の午前中というのに、ふた組の見学申込みがあるというので同行させてもらった。ビールの原料を説明するコーナーでは、良質のビールを作るためにはホップや麦の原料が大切であるばかりでなく、良質の水が大量に必要なのだと強調。

「朝倉の山々を源とする清らかな水を、高度な水の処理技術によって磨き、100以上の審査基準にクリアした後、ビールづくりで使用しております。350ミリリットル缶のビールを作るのに、缶の洗浄も含めると、約3リットルもの水が必要となります」

ガイドを務める藤吉さんが、よどみのない案内をすると、佐賀県杵島郡から来た見学者たちは「おおっ」と、驚きの声を上げた。

実際に植林をする際、キリンビール福岡工場では、作業をする人を募り、当日の費用としてバス代や弁当代を出すのが、基本的にはボランティアで参加してもらおうようになっている。

準備は、地元の

朝倉森林組合が福岡森林管理所と相談して行う。参加者の数に合わせて苗木を用意するのはもちろんだが、防鹿ネットなどの

資材や下刈り鎌などの準備もある。

山への関心が高まってきた

朝倉森林組合の窓口として「キリン福岡水源の森づくり」に協力している事業課長の手嶋富與さん(51)は、企業が植林に参加することのメリットとして、市民の山に対する関心が高まることを上げる。

「実際に作業することで、山仕事のきつさ、爽快感を理解してもらい、苗木の成長を楽しんでもらえる。水源の森を育てる楽しみを味わってもらえれば、山への関心も深まってくれるでしょう」

「キリン福岡水源の森づくり」が対象にしている白石国有林の植林地は、あと10年間の下刈りが必要だ。今年は7月25日に、二回目の下刈り作業が予定されている。

キリンビール福岡工場では、「キリン福岡水源の森づくり」の他に、工場内ビオトープとして「ホタル池」の見学会を行い、ゴミゼロ工場を運営するために工場内リサイクルセンターを設置するなど、これまでも環境に考慮した工場経営を行ってきた。その企業姿勢が、仕事以外のCSR(企業の社会責任)活動への社員参加を支えてきたのだろう。

福岡工場は、社員全員で約250人。工場の製造部門は三交代で働いているので、実際に植林や下刈りに参加できるのは限られた社員だけだ。その中で、昨年の下刈りには80人ほどの社員が参加している。

キリンビール福岡工場で、広報を担当する川畑耕一さん(41)は、これまでの植林作業に社員仲間と一緒に参加して、山仕事の爽快



感を実感したようだ。

「急斜面で、体はきついけど。植林が終わって苗木がきれいに並んだのを見ると、気持ちがいいですね」

平成18年から始まった「キリン福岡水源の森づくり」は、ようやく予定の植林が終わったところである。これからも下刈りと育成を含め、平成47年までの支援を約束している。この間、多くの社員が、市民と交わり森と関わることで、社会や環境への関心が一層深まることだろう。

キリンビール(株)にとっては、ビールの原料となる水の恵みを守ることができる。森林組合にとっては、市民が森林への関心を高めるメリット。それに、実質的な森林の造成と育成が進むという林野庁の思惑が一つになって、「キリン福岡水源の森づくり」は、地域貢献の役割を着実に果たしているようだ。

写真・文/芥川仁

- キリンビール福岡工場
- ☎(代表) 0946-23-2111
- キリンビアパーク福岡
- ☎(予約受付) 0956-23-2132

上/キリンビアパーク福岡の見学コースで。良質のビールを作るためには原料のホップや麦が大切なばかりでなく、良質の水が大量に必要と説明を受ける佐賀県からの見学者たち
下/工場内ビオトープ「ホタル池」

魅力ある地域へ
支援隊と住民の取組み

達人たちがガイドする熊野の豊穡な世界へ 紀南ツアーアーデザインセンター

三重県
くまのし
熊野市

恵み豊かな山と川、海があり、信仰の道・熊野古道がある三重・紀南。ここには自然の摂理を知り自然と共に暮らしてきた人々がいる。人と自然が育んできた独自の文化を「旅人」に体験してもらい、地域振興にも結びつけたいと5年前にオープンしたのが「紀南ツアーアーデザインセンター」。熊野の達人たちがガイドする森歩き、熊野古道歩き、熊野川での舟遊び、前鬼川沢登り、伝統の技術体験等が実施され、旅人に感動を与えてきた。本誌では熊野川の風を感じながら岸辺の草花を観察する「熊野川の舟旅」を体験させてもらった。



竈前で、左からスタッフの鈴木さん、宮本さん、小山さん

市街地の古い商家が事務局

紀南ツアーアーデザインセンターの事務局がある熊野市木本町はJR熊野市駅周辺にある市街地で、海岸を走る国道を曲がり大通りを一歩入ると、狭い道路がいくつもあり両側に古い家々が軒を並べている。小さな理髪店、雑貨屋、酒屋もある懐かしい街並みである。その一角にある純和風建築の二階建ての家が紀南ツアーアーデザインセンターの事務所だった。明治20年頃に建てられたという商家で、当時から殆ど改装せず手入れしながら使ってきたが、持主の林業家奥川吉三郎さんが、センター設立に賛同して地域の方々のために役立てて欲しいと寄贈したものである。

季節の花を生けて水打した玄関、暖簾をくぐり格子戸を開けると広い土間があり、地域の作家たちが創った陶芸品やガラス製品が展示され、奥には貴重な四連の竈がある。

早速スタッフの小山阿希子さんと宮本淑子さん、鈴木嘉将さ

◀上から／古い商家を活用した紀南ツアーアーデザインセンター建物／瀟洒な玄関口／手入れされた庭と廊下／一階奥に設けられた資料室





んが出迎えてくれて、奥の和室に通された。外側には寸分の狂いもない格子戸がはめられ、襖で田の字に区切られた座敷、彫りの見事な欄間、格調ある床の間等々があり、職人の技

と使ってきた人の心遣いが伝わってくる。廊下の外には、盆栽仕立ての植木や庭石があり、外塀はやさしく目立ちにくい土塀で囲っている。旧邸を引き継いだセンターのスタッフにとつて、この歴史ある家を磨き手入れしていくことは結構大変だろうが、紀南ツアーデザインセンターの趣旨や活動を象徴する場として申し分ない。熊野にきた旅人は、この家とスタッフの笑顔にまず感動し、体験ツアーに胸をときめかすことだろう。

座敷で待っていてくれたのは林業家・鈴木祥嗣さん(64)。熊野の森を知り尽くしており、神々の棲む巨樹の森や原生林等へツアー客をガイドしてきたが、午後到着した我々には「今日はとても行けないねえ」と言い、熊野川を船でいくツアーに同伴しながら話を聞かせてくれることになった。

小山阿希子さんが、この日の朝、竈で沸かしたお湯で入れた地元のほうじ茶を持ってきてくれた。香ばしく素朴な味わいのお茶と蕎麦で包んだ和菓子には普段の味がある。

「私の毎日は、朝の土間掃除と竈に薪をくべて湯を沸かすことから始まります。番茶を炒り、戸を開けて庭の草木の手入れなどをします。ここは地域の人にとつても懐かしく心地よい場所のようで、毎日ご近所さんが立ち寄って寛いでいきます」と小山さん。接客とセンター内の企画を担当している。

同所を立ち上げたセンター長の橋川さんが任期を終えたあとは、他のスタッフと共にツアー企画と現場との調整役をしているのが宮本淑子さん。「地元生まれ育ちながら熊野の魅力を十分知らなかったのですが、ツア

ーデザインを担当するようになり、どんどん熊野が好きになり、いまは夢中です」

昨年は30ツアーをコーディネートした。参加者は中高年者が増えているため、急流を登ったり笹の中を分け入って行く巨樹めぐり等には体力的に適さない人もいるが、味噌作りや番茶作り等の体験講座は様々な年齢の方にも楽しんでもらえると言っている。

その宮本さんはプライベートでは山登りを趣味として楽しんでいる、山を知り尽くした女性。

もう一人、今春御浜町役場から東紀州観光まちづくり公社に駐在して、紀南ツアーデザインセンターへ通ってくる鈴木嘉将さんがいて「ここでしっかりと働いて勉強します」と挨拶した。

「人」にこだわり続けた橋川さん

熊野古道とその景観、文化は「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界文化遺産に指定された。これを観光と地域振興に積極的に生かそうと、三重県では平成14年に県と市町村で「紀南地域振興協議会」を立ち上げ、5年間の契約でプロデューサーを公募した。

応じたのは伊勢銘菓「赤福」が開発した「おかげ横丁」の企画運営に当たっていたという経歴を持つ橋川史宏さんだった。おかげ横丁はほぼ軌道に乗っていたため、紀南地区で「日本人のもてなしの心を伝える」企画をしたかったと言う。平成16年



紀南ツアーデザインセンターを立ち上げた橋川史宏さん。一橋大卒、松下政経塾修学後、赤福[おかげ横丁]設立・運営、平成14年紀南振興プロデューサー、平成16年紀南ツアーデザインセンター長に就任

6月、橋川さんは紀南ツアーデザインセンターを設立した。ハード面の整備を考えていた県や自治体に対し、橋川さんがこだわったのは、熊野にある自然と人と文化の魅力。名前の通りツアー（旅）のあり方をもう一度デザイン（設計）し直して地域振興に結びつける。紀南地方の「豊かさ」（地域文化の深さ）を旅する人に提供する。それには、自然と寄り添って生きてきた人々がその様を訪れた人に地域文化として伝える、それがエコツーリズムだと橋川さんは言い、紀南地域振興プロデューサーに就任したその日から毎日誰かに会いに行ったという。

熊野の「人」にこだわって会ってはいろいろ話をする、その中からツアー企画が生まれ、ガイドする人たちも育っていった。同時に橋川さんは広報活動にも力を入れ、「とっておきの熊野」のツアープランをPRし、「三重・紀南エコツーリズム通信」を発行。またガイドの達人たちによる「三重・紀南エコツーリズム推進会」では、森・山・川・海・里・古道の6部会をつくって研修し、現在ガイド役として17名が登録している。

「橋川さんと話していると目からウロコだったね。こういう見方もあるんだ、俺はこれでもいいんだとか、いっぱい学んだ。不思議な人だね」と鈴木祥嗣さんは言う。

橋川さんは一昨年紀南ツアーデザインセンターのプロデューサーの仕事を終え、また伊勢に戻り（有）伊勢福代表取締役社長に就任したが、時々熊野へ出かけてきて、皆の相談役になっている。



▲熊野川に向かう荘司さん、木村さん



▲船着き場には荘司家の舟が待っている



▲救命具を着け舟に乗り、いざ出発
▲岸辺の植物について説明する荘司さん

荘司さんのガイドで熊野川の舟下り

熊野川のとうとうとした流れを見ると、信仰と木の国に来たことを実感する。紀南ツアーデザインの中で人気の高いのが熊野川を川舟で上下する旅ではないだろうか。10数人が乗れる木造船のツアーと、カヌー紀行、帆を張って風任せに川を滑る三反帆の川舟ツアーがあり、ガイドは荘司健さん。その日は健さんが自宅庭で用具を揃えて待っていてくれた。いただいた名刺には「林業 エコツアーガイド」と印刷してある。本業は林業家だそうで、自宅の裏手には手入れのいい杉ヒノキ林があり、熊野川までは田植えを終えた水田が広がる。そこから道を下ると熊野川が現れ、荘司家の舟が2艇停泊していた。

荘司さんの家は代々熊野川を行き来する物資輸送の監視役を務めてきたそうだ。

「川の流れを見て黒っぽいと腐葉土層が流れ込んだな、茶色だどこかで山崩れがおこったのかなと気になりますね」と言う。

ツアー企画の宮本淑子さんとは道々、熊野





▲様々な奇岩の出現



▲戦前に設置されたと思われる取水管



▲観光客を乗せた別の船が現れた



▲熊野川には野鳥も数多く生息

▼莊司さんの家の裏手にある森で鈴木さん(左)莊司さん

川の岸辺で発見した植物、昆虫や魚の話がはずみ、宮本さんは「莊司さんは勉強家で動植物についても造詣が深いんです。だから草花が好きな女性客に人気があるんですよ」と言っていた。

舟は紀宝町の河口近くから川上をめざして動き始めた。エンジンを稼働して走り出したが、岸辺に植物の珍しい品種や花があると速度を落とし説明してくれる。つつじやさつきシーズンで、里ではつつじが賑やかに咲き誇っているが、川沿いのさつきは風や波にさらされながら岩場で小さく可憐な花を必死に咲かせている。やがて奇岩群が現れると、莊司さんはエンジンを止めて艀を漕ぎながら、あたりの様子を説明してくれた。ツアーでは舟を岸に着けて箱眼鏡で水中を覗き、アユやウグイの姿を見たりして楽しむこともあるという。

御船島を一周したころ、仲間の舟が二人の客を乗せてやってきた。少人数でも採算度外視で実施しているのだろうか。少し気になる

ところだ。

数百年先の森を考える

鈴木祥嗣さんも林業家で、巨樹等をガイドする。

「森の奥には関ヶ原の戦いの頃に誕生した巨樹もあります。そういえば当家には、安政の頃に作られた納屋と水車があり、それを最近解体したんです。釘は鍛冶屋が手作りした貴重なものでした。解体には皆が集まってくれ写真にも撮ってもらい記録を残すことが出来ました」と少ししんみり。

代々林業でやってきたが、いま林業は大変厳しい。「人を雇う金がないので、今は息子と営んでいて、私は時々ツアーガイドを楽しんでいます」と鈴木さんは言う。

鈴木さんは熊野の森の守り神とも思えるほど、巨樹に宿る生命力に魅せられ、そこに何時間でもたたずんで木と話をするといい。「昔は特にヒノキや杉は在材として20cm位になると伐採したものです。木と長く付き合っ



たせいか、これからは300年、400年の時間の流れの中で林業を考えられないものだろうかと思っ

ています。木材の経済性に振り回されて荒廃した日本の森や放置された木々。そんな森の悲鳴もツアー客には聞いて欲しいと、鈴木さんは思っているようだ。

文／浅井登美子 写真／小林恵

●紀南ツアーデザインセンター
☎0597-85-2001
<http://homepage3.nifty.com/kinan-tdc/>

竹林の伐採に続いて、集会所裏山のケヤキを切り出して運ぶ作業。乾燥したケヤキで臼を造り餅つき大会に使うとか



魅力ある地域へ
支援隊と住民の取組み

お父さんパワーを結集して竹林整備 向淵さとやま遊友クラブむこうじ（奈良県宇陀市室生区）

月一度は集まって向淵地区の美化・植林活動を続けている「さとやま遊友クラブ」のお父さんたちが、最近取り組んでいるのが竹林の整備。増え続ける竹藪を除去して実や花の咲く木を植えよう、休耕地に草花を咲かそうと、午前中汗を流して働く。その日も地区世話人・上田徳さんと清水康男さんの呼びかけで約20人が集まって集会所周辺の美化作業に当たった。

大和の古い歴史文化が息づく村

旧室生村は、山紫水明の地に奈良時代末期から平安時代初期の仏教文化を伝える室生寺のある村として知られる。室生は町の東部、室生火山帯の奥深い山々とそこを流れる室生川溪谷に、修験道の道場や各宗派の寺院が建立された地で、のちに修円によって創建されたのが室生寺。

向淵地区は室生地区の反対側、町内の北部の開けた丘陵地帯にある市街化地区。名阪自動車道と国道165号を結ぶ地区にあり、昔から大和と伊勢や東海地区を結ぶ交通の要所であった。

しかし向淵地区の中心部、生活改善センターと呼ばれる集会所周辺は、車の騒音一つなく、水田の中に家々が建ち並ぶ美しい田園地帯。市のシンボル花になっているスズランの群生地があり、「南限のスズラン」として国指定の保護地区になっている。地区の人口は155世帯、540人。室生区の中では二番目に多い。

5月下旬の土曜日。予定では5月30日が「遊友クラブ」の地区作業日だったが、本誌の取材日程の関係で、一週間早く伺うことになっ



緩やかな丘陵地に広がる向淵地区

た。世話人の上田さんに「数人でいいから集まっていただけませんか」とお願いしておいたところ、集会所には9時ごろから次々と作業服をきた男性たちが集まってきて、10時には20名となった。

皆さん、白っぽい木綿のシャツをきちんと着て軍手とタオルを持ってきている。

「遊友クラブ」代表・

竹林整備のリーダー清水康男さん、老人クラブ会長の龍本義平さん、自治会長の野田佐十郎さん、副会長の福井達旺さん――。最初は自己紹介をしてもらっていたが、ごめんなさい、次々とやって来られたのでメモを取るのをあきらめ、まずは全員集合で写真を撮らせてもらった。

集会所の近くに昔農協が使っていた建物があり、そこを譲り受けて、作業に使う用具やヘルメットを収納している。

ほとんどの人が兼業農家で、近鉄大阪線に近いことから、奈良、京都、大阪方面へ勤めに出ている。1時間もあれば大阪への通勤も可能だと言う。一方、「もう勤めを辞めて野良で働いているよ」と言う人も何人かいたが、皆さん若々しく生きがいい。せつかくの休日なのに、作業することを嫌がるどころか、楽しみに集まった感じで、「遊友クラブ」の名前

の通りである。「向淵さつやま遊友クラブ」は、里山の機能回復活動を目的にしており、増殖する竹林の整備が重要作業になっている。各地の農山村を取材してきて「お母さんパワー」には出会ってきしたが、お父さんたちがこれほど身軽に集まってくれて、地区の美化活動に取り組んでいる例は珍しい。作業をみながら「やっぱり、お父さんパワーは凄い」と実感すると共に、呼びかけてくれた上田さんと清水さんの力量と人徳によるものが大きいと感じた。

県主催の「新世紀まほろば塾」で 地域おこしと竹林の整備を学び直す

上田徳さん(55)は、関西電力奈良支店に勤務しながら地区活動を長年手がけ、宇陀市の市会議員をしているが、昨年奈良県が主催する地域づくりの人材養成講座「新世紀まほろば塾」に参加した。

この講座は、21世紀の地域づくりに必要な総合力とマネジメント能力を備えた人材養成が目的で、平成14年に開塾した。講師は奈良県立大学の教授や地域おこしの専門家たち。毎年7月に塾生20名を募集し、8月から月平均2回土曜日の午後から夕方まで、講義や地域視察、グループワーク等が10回にわたって行われる。

上田さんは昨年10期生に応募、半年間奈良市まで通い、レポートにまとめて今春「竹林の再生による景観改善と竹林の活用」を発表した。

「竹は繁殖力が強く、面積を増やし背丈も伸びるため、以前はよく見通せた地区の風景が

竹林に遮られて見えにくくなりました。そのため清水さんらが中心になって竹林の整備を少しずつ行ってきましたが、私もまほろば塾のグループ研究で竹林をテーマにし、専門家

遊友クラブの皆さん。収納庫前で。上段右から3人目が上田さん、左隣りが清水さん





▲水仙の球根を植えるメンバーたち



▲可憐で清楚なスズラン。各家庭の庭にもあり、5月中旬〜6月上旬に開花する
▲南限のスズラン群生地を記した看板の前で



▶竹林の後に植える予定のツツジ、モミジの植林地で。上田さん、清水さん(右)



ている。

のアドバイスを受けました」
それによると、竹は一回伐採してもまた生えてくるため3回刈り取りが必要なこと。また活用法として、刈り取った竹を粉砕したものを土に混ぜたり表面に敷くことで、堆肥となり、雑草が生えにくくなるという。集会所の裏手の林は建物に触れるほど竹林があったが、昨年すべてを伐採して明るい林になり、地面には粉砕したチップが敷かれている。しかしすでに竹の新芽が伸びており、3年間は刈り取りが必要になる。

竹の粉砕では、旧式の粉砕機を使ってチップ状にしていたため、音が煩いと住民から抗議がきた。そのため現在は粉砕作業を中断し

竹林の整備に取り組んできた清水康男さん(65)が見せたいものがあると行って案内してくれた休耕地には、竹の後に植栽を予定しているツツジ等が植えられていた。花が咲き実をつける低木を植えて、子供が出入りできる林を作りたいと上田さんと清水さんは言う。

一方で、集会所の屋根に枯葉を落として住民から苦情が寄せられていたケヤキも伐採されることになり、ひと足早く来た倉本忠博さんが黙々と幹に電動のこぎりを入れていた。根回りは1mもあろうか、もったいないと思ったが、このケヤキで子どもたちも手伝って臼を造り、地区の餅つき大会に使うと聞いてほっとした。

スズランと花のあるまちに

別のグループは集会所脇にある畑に水仙の球根を植える作業。皆さん馴れた手つきで手際よく畝をつくり、施肥してから球根を置いていく。また畑の水際には家庭から株を持ちより菖蒲も植えることになっており、春と初夏に美しい花の咲く丘陵地ができることで、集会所へ来る住民の楽しみが増えそうだ。

この集会所(生活改善センター)は元小学校だったが昭和43年に廃校となり、地域集会施設として使用していた。それを向淵地区出身の野田順弘さん(オービック社長)が私財を投じて全面的に建て直してくれた。高級建材を使い照明や空調等も最新設備を備えた建物。地区中央の見晴らしのよい場所にあり、遊友クラブでは周辺の景観と美化活動に力を入れている。

車で10分ほど走った山中に昭和5年に国の天然記念物に指定されたスズランの南限群生地がある。標高450mほどあり、クヌギやコナラの木で半日蔭を作って育てているが、成育の悪い場所もある。温暖化の影響か、こまめな手入れが必要で、おまけにカメラマン等が撮影のために踏み込んで倒した場所もある。「家から元氣なのを持ち寄って本格的にテコ入れしましょう」と誰かが叫んでいた。お父さんたちの仕事は今後も尽きそうにない。文/横田塔美 写真/小林恵



作業が終わって集会所体育館で。挨拶する上田さん(右)

●奈良県地域振興部地域づくり支援課 ☎0742-27-8474
●宇陀市農林課 ☎0745-82-3679



月山山麓に再現した「日本の風景」 新たにシネマの感動と歴史を刻む 庄内映画村 プレオープンつるおかし はぐろ(山形県鶴岡市羽黒)

上／武家屋敷と宿場街のセット 下／資料館には「おくりびと」で使用されたお棺も展示

今年9月12日にオープンする庄内映画村オープンセットを運営する庄内映画村は、「蟬しぐれ」(平成15、16年撮影／黒土三男監督)、「JANGO」(ジャンゴ) (18年撮影／三池崇史監督)、「山桜」(18年撮影／篠原哲雄監督)、「ICHI」(19年撮影／曾利文彦監督)、「山形スクリーム」(20年撮影／竹中直人監督)、「スノープリンス」(20年撮影／松岡錠司監督)、「座頭市ザ・ラスト」(21年撮影／阪本順治監督) が撮影され、それらのセットの一部を保存してきた。

私たちが取材に伺った日も撮影に入っている時代劇の宿場町が美術監督や大工さん達の手で作られている最中で、ここには旅籠や酒屋等40軒が軒を並べる200mもある宿場町

今年9月12日にオープンする庄内映画村オープンセットを運営する庄内映画村は、「蟬しぐれ」(平成15、16年撮影／黒土三男監督)、「JANGO」(ジャンゴ) (18年撮影／三池崇史監督)、「山桜」(18年撮影／篠原哲雄監督)、「ICHI」(19年撮影／曾利文彦監督)、「山形スクリーム」(20年撮影／竹中直人監督)、「スノープリンス」(20年撮影／松岡錠司監督)、「座頭市ザ・ラスト」(21年撮影／阪本順治監督) が撮影され、それらのセットの一部を保存してきた。

「日本の原風景」や「浪漫」を集積した村

鶴岡市出身の藤沢周平の歴史小説が次々と映画化され、鶴岡市内や庄内各地で撮影された「おくりびと」が米アカデミー外国映画賞を受賞したことから、庄内地方が映画のロケ地として人気を呼んでいる。数々の映画製作に協力し、その折に造られた昔の農村漁村、宿場町等のセットを撮影後も壊さず保存してきた庄内映画村(株)。88haという広大な敷地に点在するオープンセットがいよいよ9月から一般公開される。



庄内映画村資料館とオープンセットまでは鶴岡駅からレトロバスが送迎する

が出来上がるという。江戸時代のセット村から戻ると、セットの外側では道路や電気、上下水道の設備工事が大詰めを迎えていた。

案内してくれた庄内映画村(株)副社長・丸山典由喜さん(42)のお話では、今後も撮影予定の映画が7本あり、急な撮影が入ったため、当初7月に予定していたオープンセットの一般公開を9月まで延ばすことになった。

また一般公開後も撮影がある場合は、その場所は非公開にせざるをえないと言う。

この88haの広大な土地は、ゴルフ場建設が計画されたが20年間放置されたままになっていた雑草地で、映画製作会社が購入したもので、東京ドーム20個分という東西に長い土地で、

まず最初に現れたのが昔の宿場町風景。破れた障子、木戸、開けて入ると土間にはいろいろがあり、貧しい時代の民家や飯屋等が軒を並べる街。今にも老婆や子どもが出てきそうな気配が感じられる。その先には映画「座頭市ザ・ラスト」で建築された本格的な武家屋敷黒光りする大黒柱や板の間がある玄関口、老舗旅館の客間にも負けないほどの和室、磨きあげた廊下。そこから眺める植木も見事だ。床と壁に血のりの壮絶な痕跡も残っていた。

「撮影の前には下見や準備のためにスタッフが2、3カ月前にきて滞在します。街や家を作るために地元の大工や土建業者も手伝いますが、新しい木材を使って古くて朽ちかけたように見える家や用具を作るわけで、美術や大道具の方たちからいろいろ学びます。木の香を生かしたピカピカの家を丁寧に作る仕事をしてきた大工には、映画の家づくりは大変刺激的なようです」と丸山さんは言う。



海岸の砂を敷き廃船もある漁村のセット

次に現れたのはひなびた漁村。海岸から運んできた砂地の道路には貝類の破片も混じり、朽ちた網や船もある。約360mにわたって漁村特有の白っぽい家々が軒を連ね、どこからか潮の匂いと波の音が聞こえてくるような錯覚に陥る。骨董店から集めてきた小道具も無造作に置かれている。

その先には農村風景が広がる。棚田には手植えた稲苗が風にそよぎ、周辺には数軒の茅葺民家が建つ。神社や水車、森もあり、日本のかつての原風景、貧しくも自然と共に生きた農民たちの暮らしを彷彿とさせる。

これらの街や家のセットは直線距離にして1km近くあり、時代劇を一本つくるのに膨大な時間と予算、人手がかけられていることを改めて思い知った。

そんな中に紅いテント小屋があり、中にはファンタジーな小物や西洋骨董が置かれている。この小屋は入園窓口とビストロにして、



本格的武家屋敷と見事な庭園のセット



茅葺民家の前には手植えた小さな田んぼがあり、クローバー等の野草の宝庫

喫茶やグッズの販売所に当たっている。

セットは冬も公開する予定で、「大変なのは雪降ろしや除雪です。複雑に微妙に出来ている家々なので雪降ろしには神経を使います。でも冬景色も素晴らしいですよ。その上、今後も次々と新しいセットが登場しますから、



スノープリンスで作られたテント小屋



大蚕室だった建物を借りて映画資料館に

庄内藩の歴史風土が 藤沢周平の時代小説を生んだ

何度来ても変化のある楽しい場所になるはず
です」と丸山さんは自信を持って語る。鶴岡
駅から映画資料館、オープンセットまでをレ
トロバスが運行する。

庄内映画村の事務所と映画資料館は、月山
山系の麓、松ヶ岡開墾場内にある。国指定史
跡に選定され、老松と桜、古池のある庄内藩



▲資料館に展示された小道具や部屋のセット



▲▲レストラン「待」と、人気のハヤシライス

の本陣から巨樹の茂る道路を入ると5棟の大
蚕室が建つ。江戸時代末期には江戸治安や幕
府打倒を狙う薩摩藩と闘ったが大総督西郷隆
盛の前に静かに刀をおいた庄内藩。明治維新
を迎えたが、郷土愛に燃える折り目正しい強
靱な武士集団を解散して士族が職を失うこと
を心配した庄内藩中老菅実秀は、開墾による
桑園造成と大規模な養蚕を計画した。明治5
年、庄内志士約3000人が原生林を開墾し、
養蚕では先進地の群馬で研修した技術者たち
の意見を聞いて当時10棟の蚕室を建築し、後
に製糸工場も作られた。

昭和40年以降は養蚕の衰退で徐々に閉鎖、
現在庄内映画村が事務所と映画村資料館とし
て2棟を借りている。

「私たちが『若殿』と呼んでいる酒井忠順さ
んは19代目で映画村の株主の一人、長男が経
営する『待』というレストランが隣にありま
す」と丸山さんは言う。



時代小説で人気の藤沢周平は、昭和2年に
旧黄金村の農家二男に生まれ、師範学校を
出て山形県で教師をしていたが肺結核で療養
のちに東京へ出て小説を書き始めた。庄内藩
は海坂藩という名前で常に登場し、下級武士

上/丸山副社長(事務所にて)
下/オープンセットを点検し
て回る「刺客」美術スタッ
フの小出間憲さんと映画村
スタッフの江口亮太さん



庄内映画村株式会社 設立とその効果

や農民らの厳しくも心温まる暮らしを書いて
いる。

藤沢作品を基に「たそがれ清兵衛」を映画化した山田洋二監督は、酒田市へロケの下見に

来て、当時鶴岡市観光物産課で働いていた丸山さんが市内各地を案内した。以来、酒田や庄内地方を映画のロケ地にしたいという話が多くなり、その都度丸山さんがガイド役を担った。

「僕は鶴岡生まれで、歴史が好きで京都の大学へ行った。帰ってから市の観光物産課で働いてきましたが、特に映画が好きというわけではありませんでした。庄内映画村を設立して手伝うようになったのは宇生雅明氏（現庄内映画村の社長）との出会いでした」

宇生さんは東京でIT企業を経営しており、親戚だった黒土監督が長年温めてきた藤沢作品「蝉しぐれ」を映画化しようとプロデュースを引き受け、鶴岡へきて撮影を手伝った。その時、丸山さんら地域の人々が映画実行委員会を組織し、手弁当でエキストラで参加したりロケ地の設営にも協力してくれた。それが見つけかけとなり宇生さんは映画村株式会社を設立しようと、自ら庄内の企業やホテル等を回って、一社50万円の協賛金集めを行った。101社が協力会員になってくれ、映画村は株式会社として18年に設立、丸山さんも昨

年9月に市役所を辞めて、副社長として働いている。社員はパートを入れて30名だったが、オープンセットの公開で60名に増えている。

「映画という切り口で町の活性化を図りたいと思います。ロケ地となってから大工の仕事が飛躍的に増えた他、レンタカー、食事、宿泊施設等の利用が多くなり、その効果は大きい。一つの映画が始まると最低でも60〜70人が滞在しました。弁当も一日4食注文されます。当社としては資料館とオープンセットへの入館者の増加がカギとなりそうです」と丸山さんは淡々と話す。

もう一人の名物スタッフが、庄内映画村資料館館長の画家・平野克己さん(45)。東京に事務所を持つ水彩画家だが、「おくりびと」の撮影スケッチを頼まれて来村、以来「鶴岡の風土や人々が気に入って来村、年中来るようになりました」と言う。

映画撮影中はスチールマン以外は写真を撮ることができないため、平野さんは許可を得て現場に立ち、数秒間、数分間で役者の表情や撮影の様子をスケッチする。普通一分間に一枚描くという、ペンや筆を自在に使って描いた絵は、写真とは違った趣があると好評で、資料館内での展示にとどまらず、巡回展も行われている。

「鳥海山と月山を望むこの地の自然も素晴らしいが、ここに住む人々がいい。エキストラをする人々はこの風土を身につけています。映画に興味がなかったと淡々と言う丸山さんも大変な熱血漢で、時代劇の撮影が始まると車の音が入らないようにと周辺の車の走行を

平野館長と平野さんがスケッチした映画撮影のスケッチ



ピシヤリと止めてしまう力を持っています。映画づくりを私も共有していこうという気持ちになりました」と平野さんは一週間おきに映画村へ来る生活をしている。

資料館では映画に使われた部屋を再現したり小道具や資料、写真等を展示し、予告編等を観ることができる。今まで資料館だけで年間2〜3万人の見学者がいたが、オープンセットの開園で7〜8万人が来ると予想される。そのため環境にやさしいレトロバスを鶴岡駅、映画資料館、オープンセットと巡回する。

これらの施設を見学すると、その映画をぜひ観てみたいと思うので、次は市内の映画館で上映してくれるとありがたい。

文／浅井登美子 写真／小林恵

山間部の集落維持と活性化を！ 総務省の「集落支援員制度」

同じ市町村の中でも山間部や島などは過疎化と高齢化が進み、独り暮らしや高齢世帯が多くなっている。そのため田畑の休耕地が増え、地域活動も停滞、また町村合併により地域活動が低迷した地区もある。

総務省は昨年8月、「集落支援員制度」を創設、市町村やJAの職員OB、地域の事情に明るい人、田舎暮らしに関心のある外部の若者等の人材を支援員として派遣して、過疎集落を見回り、住民生活の相談や支援、集落の維持や活性化に関する手伝いをしてもらう制度を設けた。集落支援員設置の自治体には、人件費を含めた経費を特別交付税で国が負担、支援員には報酬が支払われる。

制度施行半年後の平成21年2月の時点ですでに11府県、市町村では26道府県の66市町村が設置、支援員数は専任199人、兼務約2000人であることがわかった。

【集落支援員・実施地区の一例】

- ・和歌山県すさみ町——専任支援員5人と役場職員による「集落見守り隊」を結成し、11地区を定期的に巡回していくことになった。
- ・岩手県田野畑村——3人の専任支援員がいて、高齢者の見回り、休耕地に山菜を植える、都市の人に農家宿泊をPRする等の活動をしている。
- ・上越市中ノ俣地区——都市から移住または田舎暮らしに関心のある若者7人で結成したNPO「かみえちご山里ファン倶楽部」が交代で農家の農作業や棚田の手入れ、雪下ろし等を支援している。中



ノ俣地区は平均年齢74歳、21世帯が一人居らして、現在都市から来た若者が定住して支援活動に当たっている。

農林漁村で体験研修「田舎で働き隊」

農林水産省では、農林漁業者の高齢化や人手不足を補い、後継者の育成を推進するため、農村活性化人材育成派遣モデル事業として「田舎で働き隊」事業を実施、隊員を募集している（募集時期や人数は地域によって異なるので詳細は問い合わせを）。現在モデル事業補助金等の交付が認められている団体（法人の農業団体、農協、大学、森林組合、漁業組合）は全国で51団体となっている。隊員には実践研修の「おためしコース」があり、「おためしコース」は最長1年間で、研修中は手当てが月14万円支給される。研修を終えてその地域や農家等へ定住・営農を希望する人も多い。

昨年の「田舎で働き隊」実績を見ると、受け入れた地区は42都道府県232市町村で延べ2500人になっている。仕事は農林業、漁業の研修の他、イベントや農産物加工所の手伝い、畜産、棚田の保全活動等で、農林漁業体験が全体の3割を占めた。参加者の年齢は20代が4割で、日数は「4～6日」が4割だった。

農林水産省農村振興局・活性化企画班

「田舎で働き隊」係 ☎03-3502-8111
内線5451

またNPOふるさと回帰支援センターでも秋田県から沖縄県まで全国15地区の農林漁村での宿泊型仕事、生活体験研修者を100～150名募集している（平成21年3月現在）。7月頃には予定の定員が集まり募集を終了する地区が半数となるので、詳細は電話かインターネットで。研修期間は平均1週間で、交通費・宿泊費・食事は主催者が負担する。他に田舎での仕事や就職、移住等の情報提供も行っている。ふるさと回帰支援センター ☎03-3543-0336 インターネットでは「ふるさと回帰」か、www.furusatokaiki.netで検索を。

島根県中山間地域づくりブレンバンク（本部/飯南町）

市町村や集落、自治会、高齢者グループ、女性団体等の要請を受けて、県内外の専門家を派遣してアドバイスや支援活動を行うもので、地域づくりのプランニング、イベントの企画運営、講演等の助言活動等を行っている。専門家の派遣諸経費は島根県が負担、資料作成等の経費は各団体が負担する。アドバイザーには、地域づくり全般部門、産業観光・マルチメディア部門、生活福祉部門に専門家等約20名がおり、地域の状況や要望を受け、農業の協力員や都市移住者の斡旋等も行う。

同ブレンバンクのスタッフとして島根県浜田市弥栄町下田原地区に移り住んだ皆川潔さん（33）は、菜の花畑を栽培、喫茶店をつくり、観光誘致、祭り復活等に取り組んでいる。しまね中山間地域研究センター ☎0854-76-2025

編集後記

- ▼石州和紙の取材で島根県三隅町へ。宿泊した「マリンホテルはりも」では、オーナーご夫妻の温かいお人柄に感激した。客室から眺めた、日本海に沈む美しい夕日も忘れられない。（R）
- ▼ツアーガイドの達人荘司、宮本さんの案内による熊野川の舟下り、宿泊した「瀧流荘」と丸山千枚田、さらに熊野から上北山村、川上村、東吉野村を経て旧室生村に至る道程は、深い森と渓谷美にあふれ、旅の醍醐味を満喫できた。またぜひ訪ねたい場所である。（A）
- ▼今回は、命と向き合う多忙なお医者さん、こつこつと農林漁業の研究調査に励む専門家たちをほんの一部だけが紹介でき、改めて関係者の方々にお礼申し上げます。（A）

De POLA[でぼら] No.37 2009 年秋冬号

発行日／平成 21 年 9 月 5 日

発行所／財団法人過疎地域問題調査会

〒105-0001 東京都港区虎ノ門一丁目 13 番 5 号 第一天徳ビル 3 階

☎ 03-3580-3070 FAX03-3580-3602

http://www.kaso-net.or.jp/

編集協力・印刷／株式会社ぎょうせい 編集工房アド・エー



交流居住のポータルサイト 発信中！！

http://kouryu-kyoju.net/

交流居住ポータルサイト「交流居住のススメ」では全国約530の各自治体が、田舎と都市を行き来するライフスタイルの情報を提供しています。生活関連情報、滞在施設、体験プログラム、その地での暮らしのノウハウなど、掲載プログラムは全国で約4500件。6種類の検索方法より、必要な情報をお探しいただけます。また、毎月第1、3水曜日にはメールマガジンを発行し、最新の田舎暮らし情報、モニターツアーなどの情報を紹介

しております。

ポータルサイト「交流居住のススメ」は、交流居住をスタートしようと考えている方のサポーターです。田舎暮らしに興味があるなら、一度ご覧になってみては。素晴らしい日本の故郷がお待ちしております。



交流居住 優良事例集 「田舎暮らしの ススメ」④

都市で生活しながら時々田舎へ行って、自然や土にふれたり地元の人や文化と交流する事例を紹介いたします。A4判80頁。本誌をご希望の方は（財）過疎地域問題調査会へ。

「交流居住」。そんな新しいライフスタイルの事例を紹介いたします。A4判80頁。本誌をご希望の方は（財）過疎地域問題調査会へ。

未来へ弾もう。^{はず}

可能性いっぱい心がすくすく育てば
きっと明るい未来が拓けるよ。
誰かがみた夢が、健やかな心を育てる……
宝くじには、そんな役立つ面もあります。



宝くじの収益金は、
身近な街づくりに役立っています。

当せんはしっかり調べて、しっかり換金。

財団法人 **日本宝くじ協会**

<http://www.jla-takarakuji.or.jp>

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。